

砂防課60年



「土砂災害防止月間」ポスター応募作品



長野県



砂防課設置60年を迎えて

長野県砂防課長 坂口 哲夫

長野県は本州のほぼ中央に位置し、広い面積を有するとともに、3,000m級の山々が連なっており、雄大な山岳と豊富な清流、四季折々の美しい豊かな自然に恵まれた環境にあります。

しかしながら、急峻な地形と複雑な地質が多く、これらと変化のある気候条件等が相まって、土石流、がけ崩れ、地すべり及び雪崩の危険箇所が数多く存在しており、過去幾多の土砂災害等に悩まされてまいりました。

本県における本格的な砂防事業の始まりは、明治13年木曾川水系の蘭川で国の直轄工事が行われたときからであり、以後百余年にわたり、多くの先人が砂防事業の推進に尽力されてまいりました。この間、県土の土砂災害に対する安全性が格段に向上し、砂防事業の成果が随所に現れてきております。ここに改めて、諸先輩方の砂防事業に対するご熱意とご尽力に深甚なる謝意を表する次第であります。

さて本年は、昭和14年3月1日に本県に砂防課が設置されて以来、満60年の節目を迎えました。当時の記録によりますと、昭和13年8月に内務省土木局に砂防を担当する第三技術課が設置され、本県は内務省の要請にいち早く応え、他の府県に1ヶ月先んじて砂防課を設置したのであります。以来今日まで、砂防事業に長い歴史を持つ本県は、我が国の砂防事業のリードオフマンを務めてきたといっても過言ではありません。

また、平成13年4月からは土砂災害防止法が施行されます。これは従来の土砂災害防止工事のハード対策と併せて、土砂災害のおそれのある区域を明らかにし、警戒避難体制の整備や住宅等の新規立地の抑制などのソフト対策を充実させるものであります。まさにハード・ソフト両面での土砂災害防止対策を推進しようとする新たな砂防事業の展開であり、本県も積極的に対応していきたいと考えております。

このたび60周年記念誌として、本県の砂防事業の沿革と現状をはじめ、本県に縁のあった方々に長野県の思い出を寄稿していただき、小冊子にまとめました。本県砂防事業関係者各位のご参考になれば、まことに幸甚に存じます。

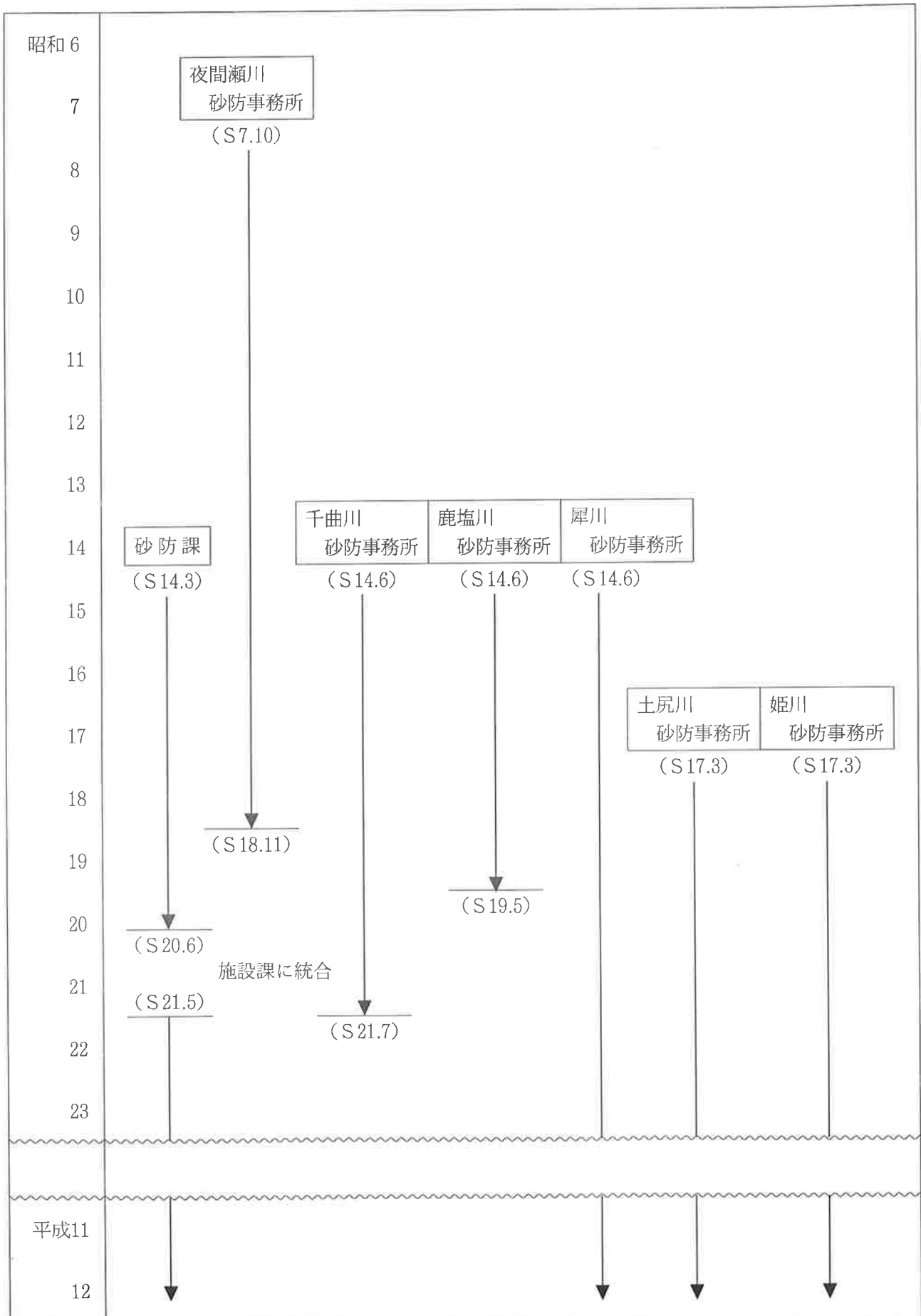
砂防課設置60年という佳節を迎え、土砂災害等から県民の生命・財産を守り、住み良い県土を築くため、職員一丸となって砂防関係事業の一層の拡充強化を図ってまいり所存でありますので、関係各位の更なるご指導、ご鞭撻をよろしくお願い申し上げます。

平成12年12月

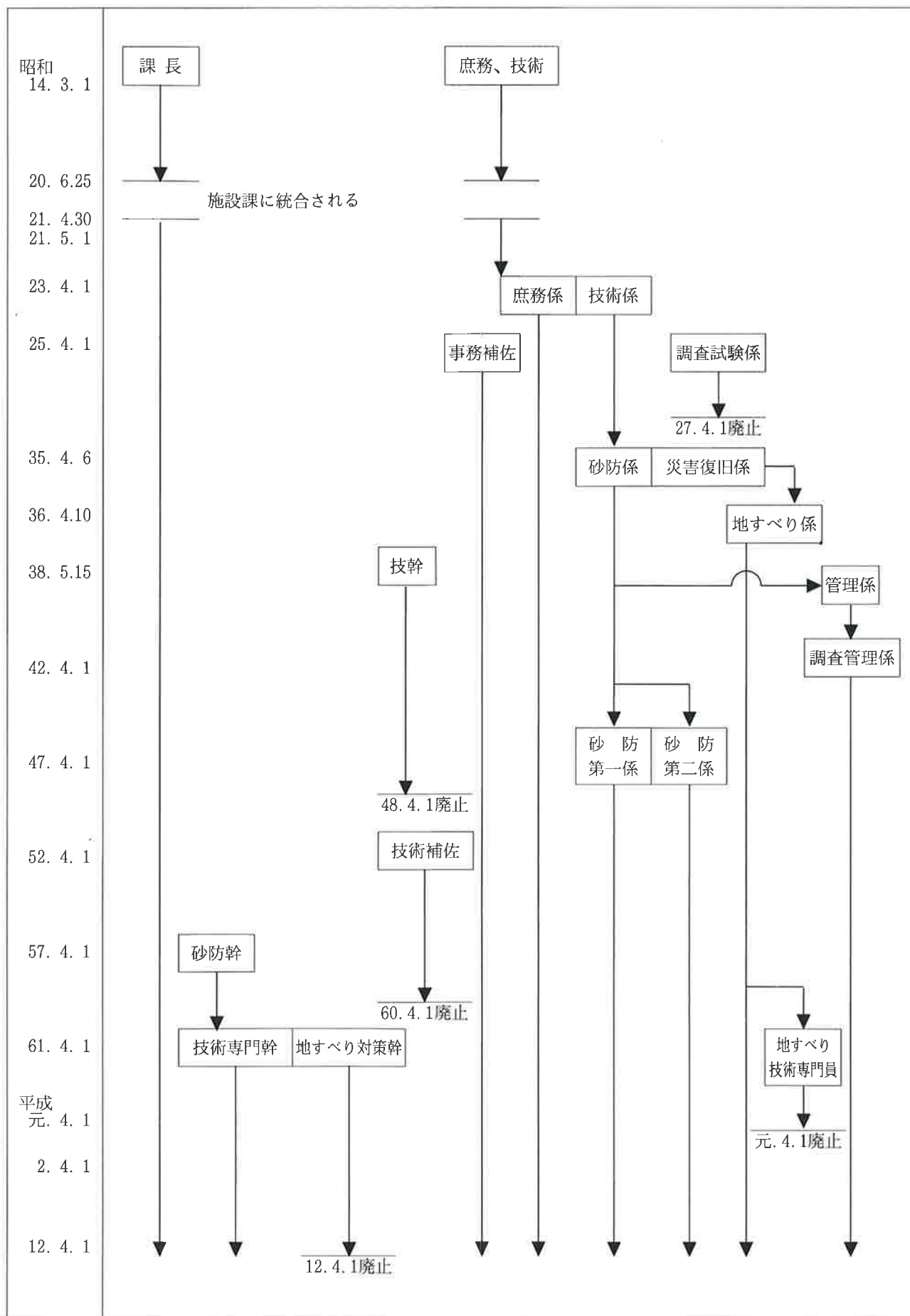
目 次

1	砂防課及び砂防事務所の変遷	2
2	砂防課組織の変遷	3
3	長野県の概要	4
4	第二次長野県中期総合計画	5
5	長野県水系図	7
6	砂防事業等実施の組織	8
7	直轄工事施工区域	9
8	砂防事業等の整備状況	10
9	危険箇所密度分布図	11
10	平成12年度当初予算の状況	12
11	砂防関係事業費（補助）の状況	14
12	砂防のあゆみ	16
13	長野県の主な災害の概要	28
14	寄稿「長野県の思い出」	33
15	歴代砂防課長一覧	54
16	歴代土木部長・土木技監一覧	55
17	建設省砂防部歴代部長・課長一覧	57
18	歴代砂防課職員名簿	60
19	長野県治水砂防協会	68
20	長野県地すべり対策協会	70

1 砂防課及び砂防事務所の変遷



2 砂防課組織の変遷



3 長野県の概要

1 位置

本県はわが国の中央部に位置して、周囲8県に隣接し、関東、中部、北陸の各地方に及ぶ、東西約120km、南北約212kmと南北に長く、総面積13,584km²で全国第4位の大きな県である。

2 地形

本県は日本の屋根とも呼ばれ、3,000m級の山々に四方を囲まれており、日本アルプスを始めとして本州の脊梁を形成し、長大河川の水源をなし、なかでも信濃川を始め木曾川、天竜川、姫川等の代表的な河川がある。

河川の特徴は、急勾配で縦横の浸食が大きく、加えて急峻な地勢とぜい弱な地質と相まって流出土砂量が大である。

位置図



3 地質

県内には、日本列島を東北日本を西南日本に二分する糸魚川静岡構造線が南北に走っており、また諏訪湖付近から西南日本を二分する中央構造線が南に延びている。

西南日本側の飛騨山地、木曾山地、赤石山地は、日本列島の造山帯としての地質構造であり、古生層、中生層の古い地層とこれに貫入した花崗岩類等から成り、急峻な地形である。東北日本側は、フォッサマグナのグリーンタフ地帯を主とし、第三紀層から成る新しい地層と第四紀層の火山岩類からなる。また千曲川上流域に関東山地から延びる古生層を主体とした佐久山地がある。

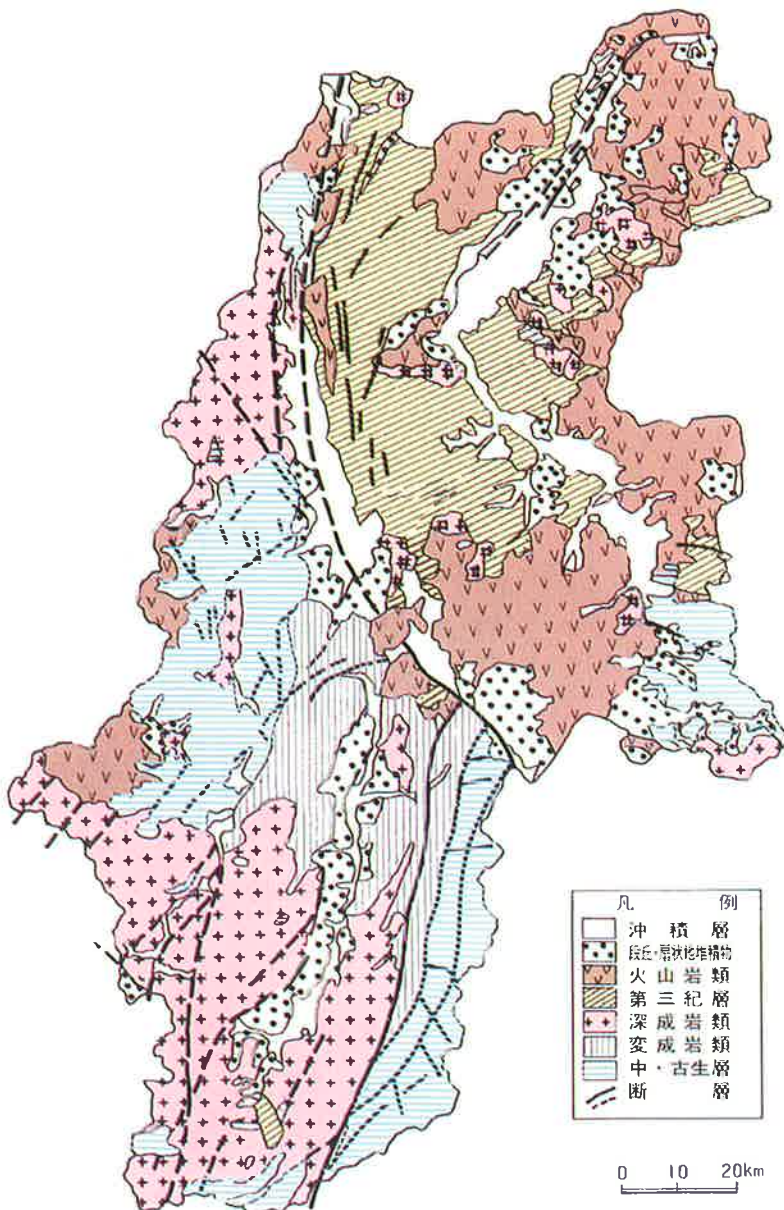
さらに県内には新期の火山活動が各地にみられ温泉変質を受けた山地が多い。このように多様で複雑な地質構造に地震帯が加わって地すべりの多発地帯を形成している。

※フォッサマグナ：本州中央部を東北日本と西南日本に分断する陥没帯である。

4 気象

本県の気象は、一様ではなく、南部地方は太平洋型、北部地方は日本海型、中部地方は内陸性で寒暑の差が大きい。

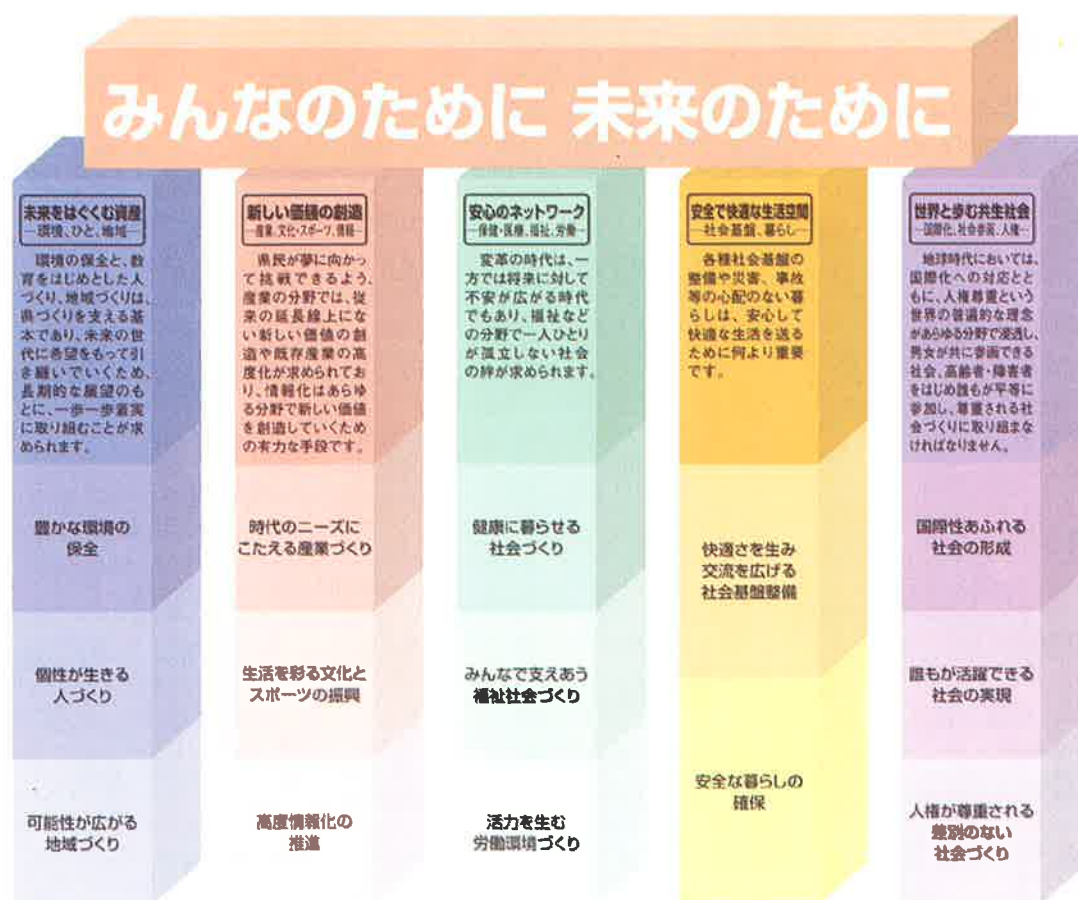
降雨量は南部に多く、また降雪量は北部県境付近及び西部山岳地方が多く、豪雪地帯となっている。



4 第二次長野県中期総合計画

(1) 施策体系

- 社会経済の仕組みが大きく変わり、世界の一体化がさらに進展する時代を迎えるなかで、「みんなのために 未来のために」県づくりを進めていくためには、時代の流れをとらえつつもそれに流されることなく、脈々と受け継がれてきた「長野県らしさ」を見つめ直し、県づくりの拠り所としていくことが重要です。
- 主要な施策を五つの柱に体系化し、総合的に推進することによって、基本計画の実現をめざします。



(2) 計画期間

平成12年度～平成16年度

(3) 財政投資

計画期間中の県の財政投資見込額は次のとおりです。

財政投資見込額		16,300 億円
普通会計	一一般会計	15,800 億円
企業会計	病院事業会計 企業局の事業会計	500 億円

(4) 達成目標

この計画を推進するに当たり、土木部では次の主要項目について、平成16年度における達成目標を設定し、その実現をめざします。

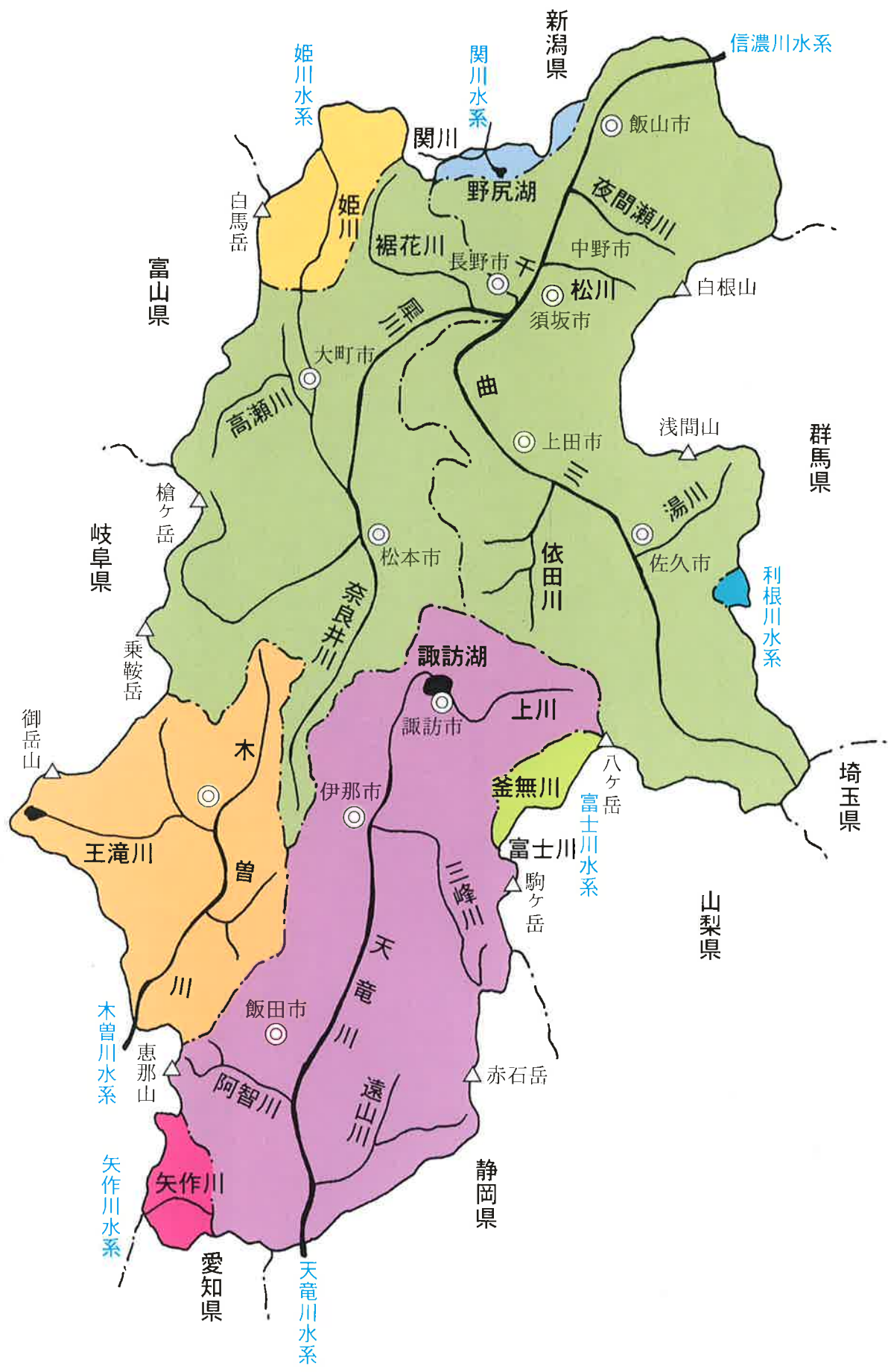
1 未来をはぐくむ資産

項目	単位	平成10年度 現 状	平成16年度 達成目標	備 考
水辺環境整備延長	km	102	178	生態系や親水性に配慮した河川改修 (県管理一級河川)

2 安全で快適な生活空間

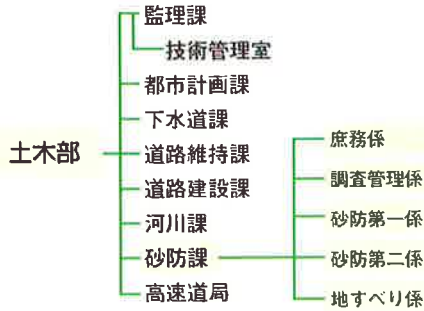
項目	単位	平成10年度 現 状	平成16年度 達成目標	備 考
上信越自動車道の四車線化	km	27.4	50.0	県内延長(111.4km)の44.9%
国道改良率	%	89.4	90.1	国道を二車線化している割合
県道改良率	%	68.1	71.3	県道を二車線化している割合
市町村道改良率	%	41.9	44.7	市町村道を二車線化している割合
市町村道舗装率	%	64.1	66.7	舗装延長/実延長
下水道等普及率	%	62.3	85	(公共下水・特定環境保全公共下水・農業 集落排水処理施設処理区域内人口+合併 処理浄化槽及びコミュニティ・プラントに よる処理人口)/総人口
都市計画道路改良率	%	36.6	40.8	用途地域内幹線街路 (改良延長H10:399.8km→H16:462.3km)
電線類地中化整備延長	km	20.0	33.7	
一人当たり都市公園面積	m ²	9.05	11.1	都市公園面積/都市計画区域内人口
河川整備率	%	34.4	36.6	改修済延長/要改修延長
多目的ダム・治水ダムの完成数	基	11	16	
砂防施設整備率	%	21.3	24.0	整備土砂量/要整備対象土砂量
地すべり防止施設整備率	%	17.4	19.4	整備面積/要整備面積
急傾斜地崩壊防止施設整備率	%	22.8	26.5	整備か所数/要整備か所数
県営公園広域防災機能強化	か所	2	4	備蓄倉庫、耐震性貯水槽、 非常用井戸等の整備
道の駅	か所	11	15	県管理分
歩道・自転車歩行者道整備延長	km	1,440	1,620	
ゆずり車線	か所	7	18	

5 長野水系図



6 砂防事業等実施の組織

長野県土木部の組織



建設事務所の組織



砂防事務所の組織

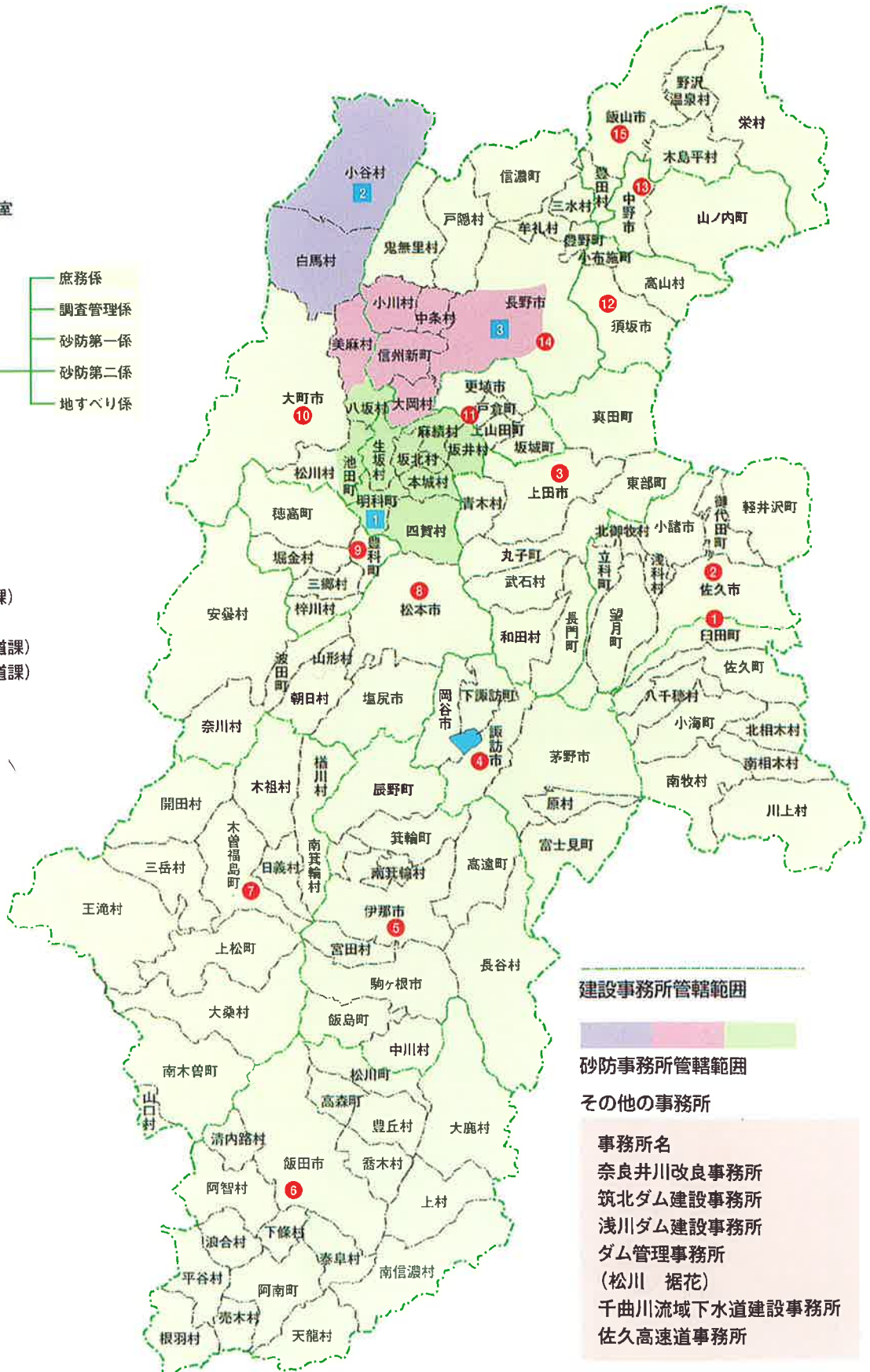


建設事務所一覧表

- ① 臼田建設事務所
- ② 佐久建設事務所
- ③ 上田建設事務所
- ④ 諏訪建設事務所
- ⑤ 伊那建設事務所
- ⑥ 飯田建設事務所
- ⑦ 木曾建設事務所
- ⑧ 松本建設事務所
- ⑨ 豊科建設事務所
- ⑩ 大町建設事務所
- ⑪ 更埴建設事務所
- ⑫ 須坂建設事務所
- ⑬ 中野建設事務所
- ⑭ 長野建設事務所
- ⑮ 飯山建設事務所

砂防事務所

- ① 犀川砂防事務所
- ② 堀川砂防事務所
- ③ 土尻川砂防事務所



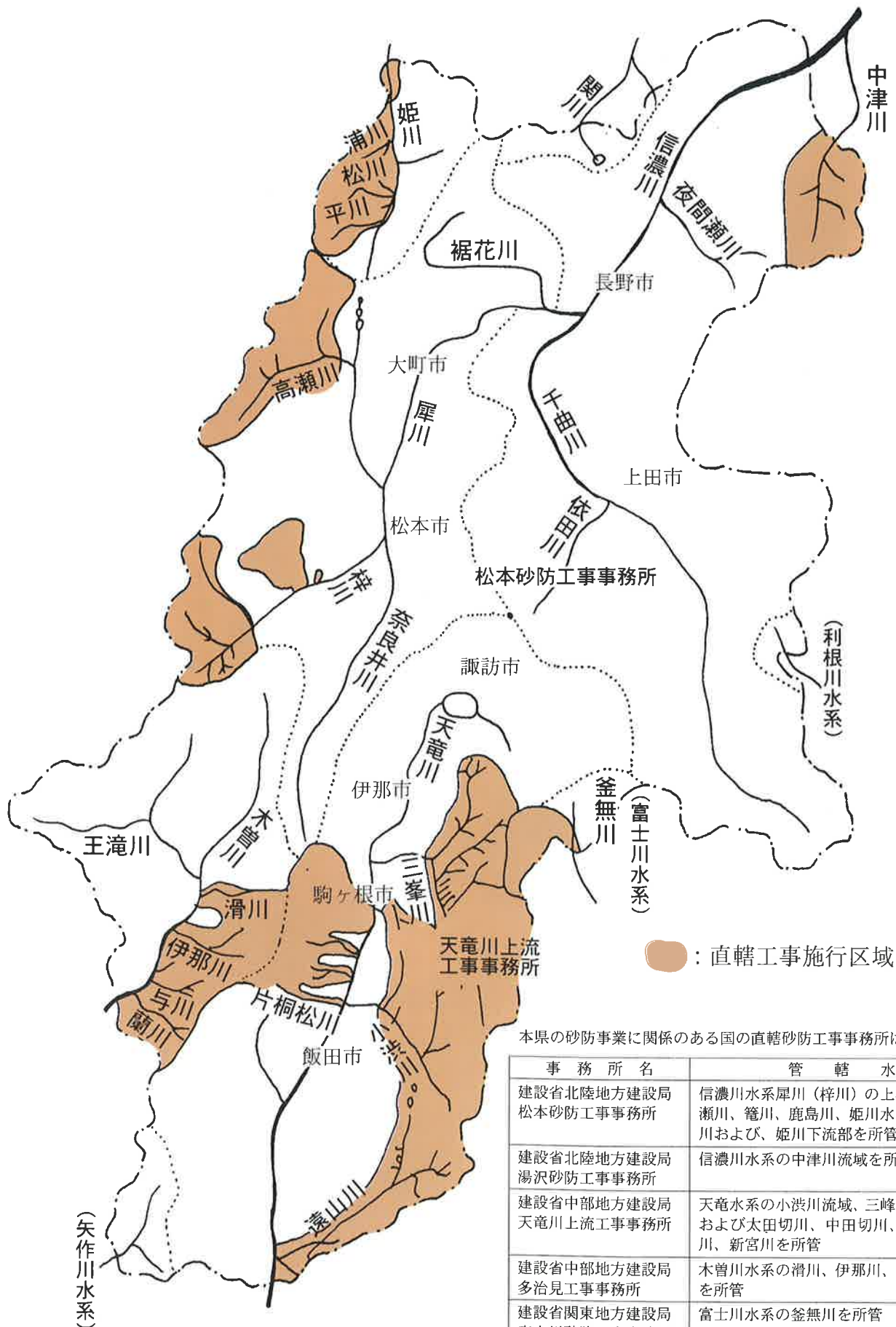
建設事務所管轄範囲

砂防事務所管轄範囲

その他の事務所

- 事務所名**
- 奈良井川改良事務所
 - 筑北ダム建設事務所
 - 浅川ダム建設事務所
 - ダム管理事務所 (松川 裾花)
 - 千曲川流域下水道建設事務所
 - 佐久高速道事務所

7 直轄工事施工区域



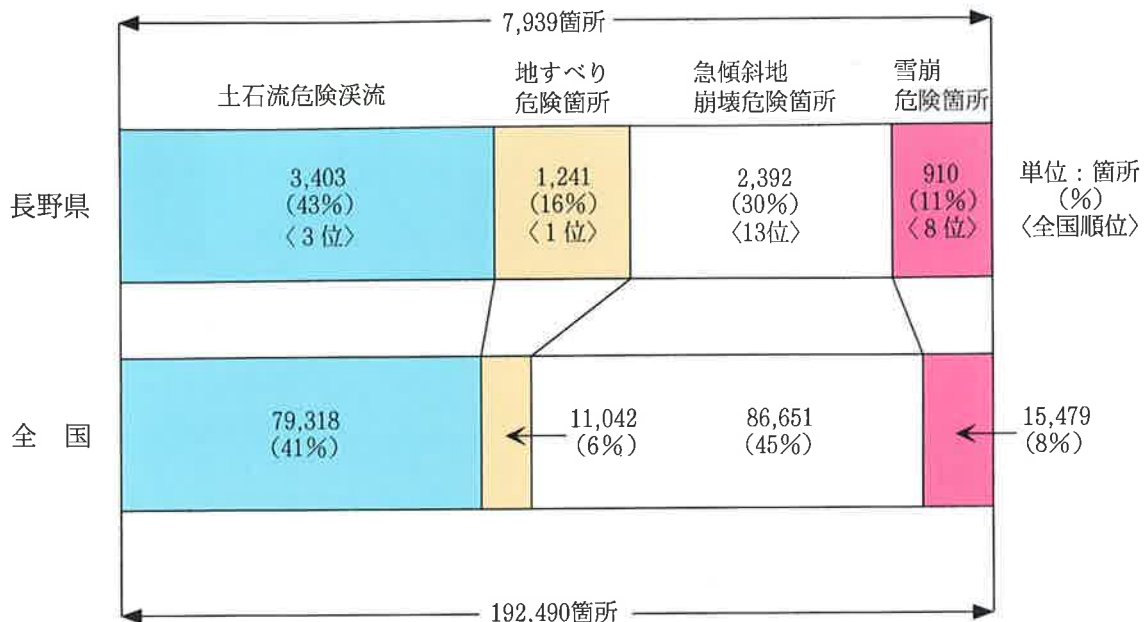
● : 直轄工事施行区域

本県の砂防事業に関係のある国の直轄砂防工事事務所は次のとおりです。

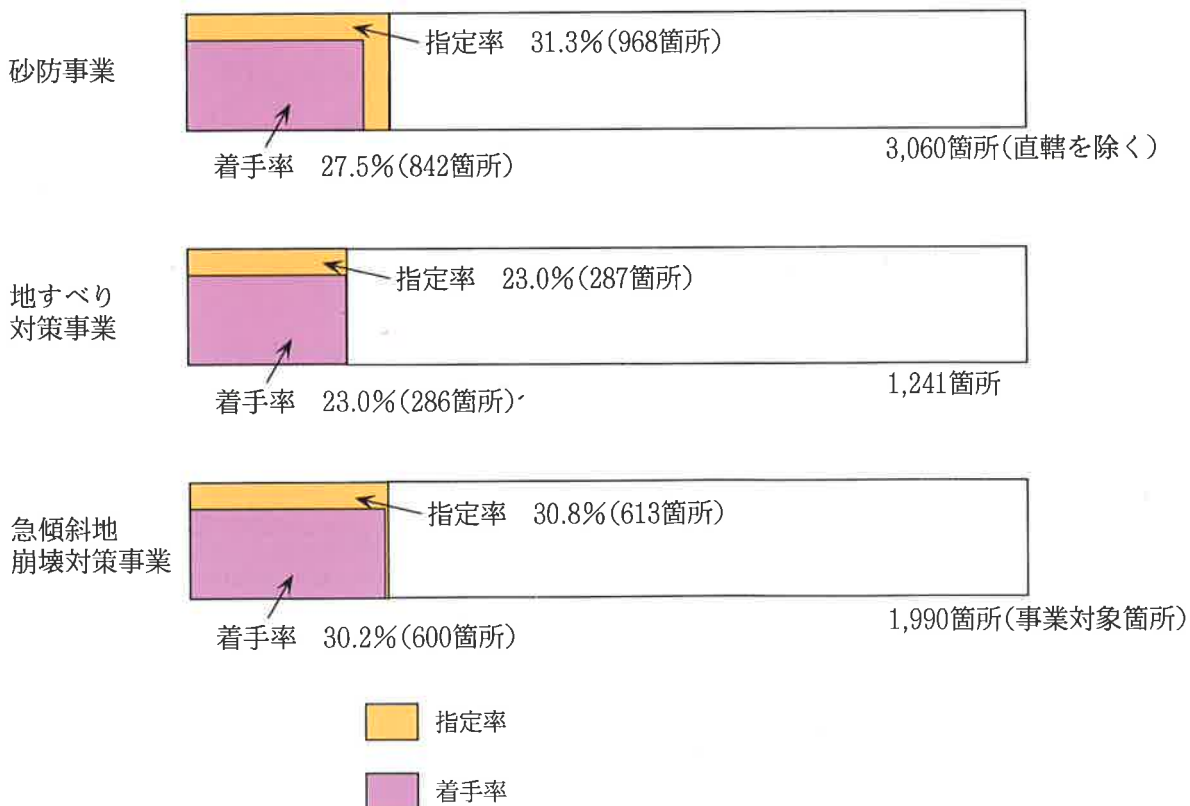
事 務 所 名	管 轄 水 系
建設省北陸地方建設局 松本砂防工事事務所	信濃川水系犀川（梓川）の上流、高瀬川流域の高瀬川、籠川、鹿島川、姫川水系の平川、松川、浦川および、姫川下流部を所管
建設省北陸地方建設局 湯沢砂防工事事務所	信濃川水系の中津川流域を所管
建設省中部地方建設局 天竜川上流工事事務所	天竜水系の小渋川流域、三峰川流域、遠山川流域および太田切川、中田切川、与田切川、片桐松川、新宮川を所管
建設省中部地方建設局 多治見工事事務所	木曾川水系の滑川、伊那川、与川、蘭川、落合川を所管
建設省関東地方建設局 富士川砂防工事事務所	富士川水系の釜無川を所管

8 砂防事業等の整備状況 (平成12.3.31現在)

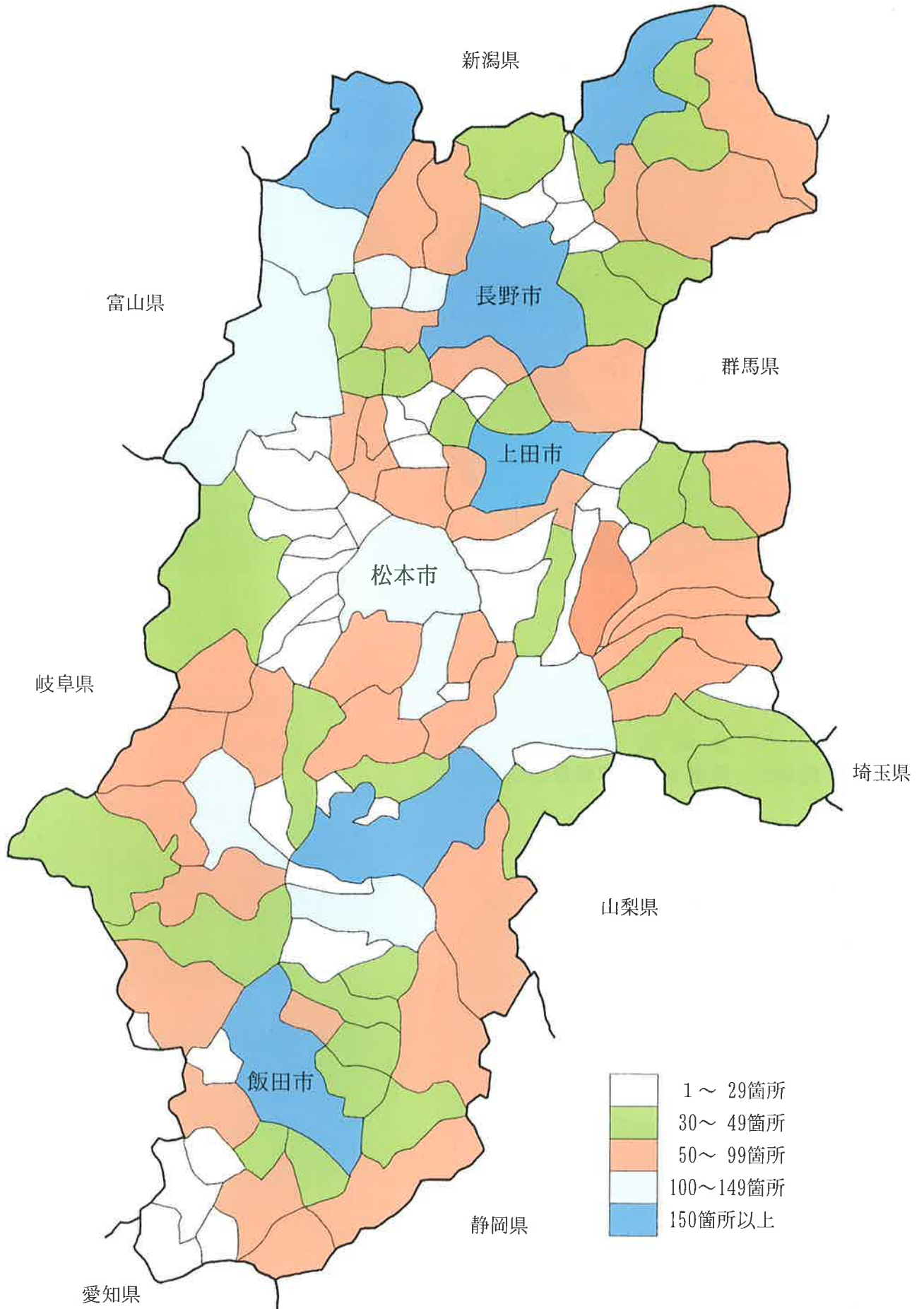
1 危険箇所数



2 整備状況 (危険箇所数に対して)

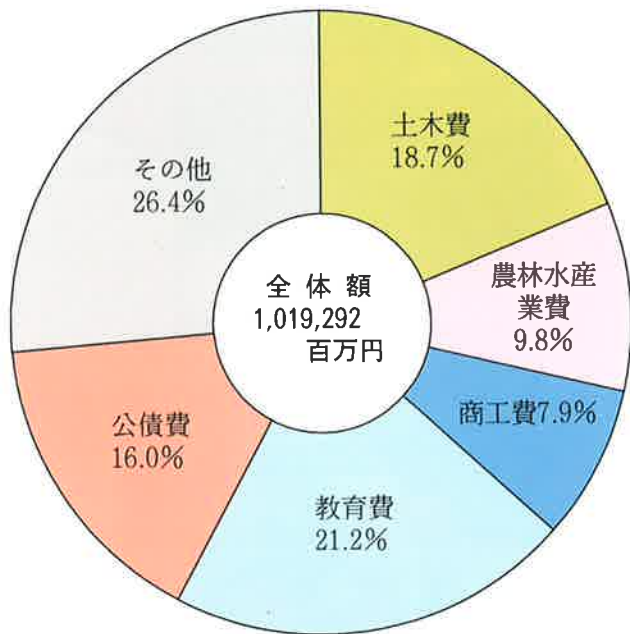


9 危険箇所密度分布図



10 平成12年度当初予算の状況

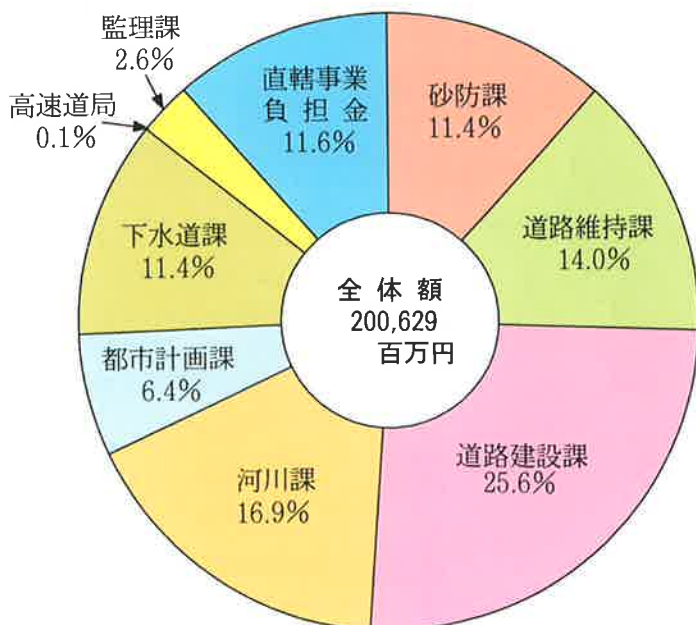
県一般会計予算(目的別)



内訳表

区分	予算額 (千円)	シェア (%)	グラフ表示率 (%)
1 議会費	1,670,682	0.2	その他 26.4
2 総務費	37,819,643	3.7	
3 民生費	64,475,188	6.3	
4 衛生費	20,038,131	2.0	
5 労働費	7,246,590	0.7	
6 生活環境費	5,663,104	0.6	
7 農林水産業費	100,050,536	9.8	9.8
8 商工費	80,700,915	7.9	7.9
9 土木費	190,521,869	18.7	18.7
10 警察費	45,969,856	4.5	その他 26.4
11 教育費	215,991,420	21.2	21.2
12 災害復旧費	13,580,791	1.3	その他 26.4
13 公債費	162,615,513	16.0	16.0
14 諸支出金	72,847,367	7.1	その他
15 予備費	100,000	0	26.4
合計	1,019,291,605	100.0	100.0

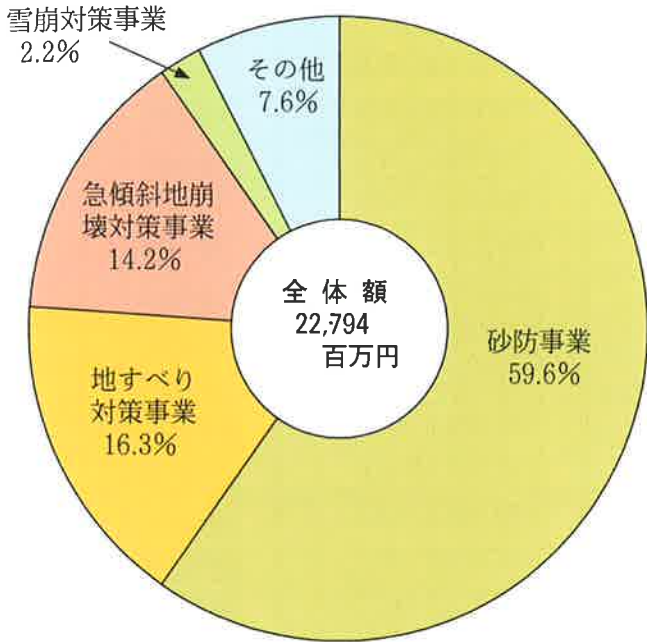
土木部予算
(一般会計+流域下水道事業費特別会計)



内訳表

区分	予算額 (千円)	シェア (%)
砂防課	22,794,444	11.4
道路維持課	28,037,648	14.0
道路建設課	51,409,000	25.6
河川課	33,833,559	16.9
都市計画課	12,903,500	6.4
下水道課	22,882,101	11.4
高速道局	248,388	0.1
監理課	5,265,183	2.6
直轄事業負担金	23,255,000	11.6
合計	200,628,823	100

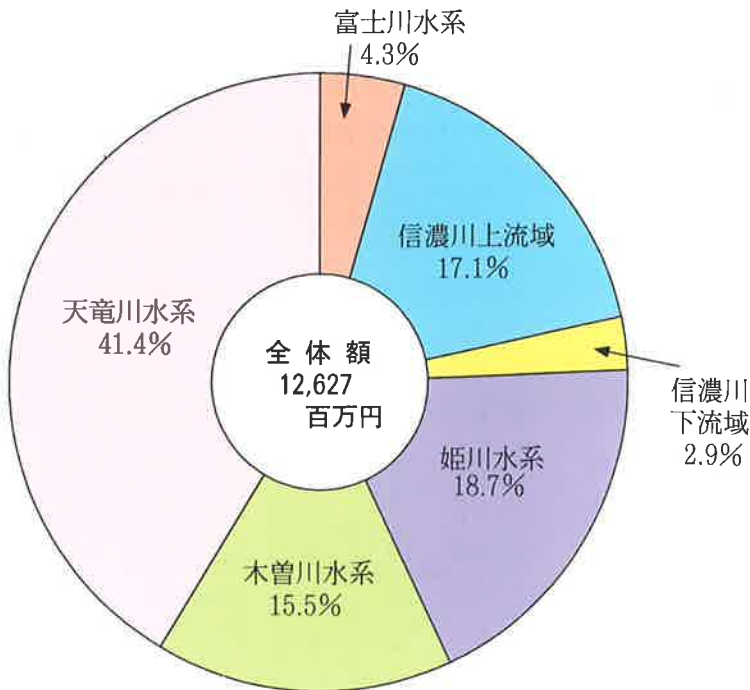
平成12年度砂防課予算



内訳表

事業種別	実施箇所数	事業費 (千円)
砂防事業	164	13,587,000
地すべり対策事業	65	3,718,000
急傾斜地崩壊対策事業	61	3,242,000
雪崩対策事業	6	507,000
その他	279	1,740,444
合計	575	22,794,444

平成12年度直轄事業予算



内訳表

区分	実施箇所数	事業費 (百万円)
富士川水系	6	548.5
信濃川上流域	15	2,155
信濃川下流域	2	365
姫川水系	6	2,367
木曾川水系	8	1,942
天竜川水系	24	5,299
合計	61	12,626.5

11 砂防関係事業費（補助）の推移

年 度	砂 防			地すべり対策			急傾斜地崩壊対策			合 計 事業費 (千円)	直轄事業 負担金 (千円)
	事業費 (千円)	全国の 順 位	全国の 事業費 対比(%)	事業費 (千円)	全国の 順 位	全国の 事業費 対比(%)	事業費 (千円)	全国の 順 位	全国の 事業費 対比(%)		
昭和20	810	1	7.39							810	
21	2,700	3	4.63							2,700	
22	2,025	17	2.37							2,025	
23	11,550	6	3.21							11,550	
24	15,000	13	2.62							15,000	
25	69,750	4	3.88							69,750	
26	132,000	2	4.27							132,000	
27	141,000	2	3.76	25,000	1	17.86				166,000	
28	204,800	2	3.60	20,000	3	12.50				224,800	
29	200,520	2	3.53	13,500	3	7.26				214,020	
30	195,825	2	3.76	8,000	8	4.86				203,825	
31	175,904	6	3.43	7,200	7	5.36				183,104	
32	200,320	5	3.82	7,200	6	5.05				207,520	
33	227,400	4	4.33	14,750	2	5.98				242,150	
34	220,200	2	3.66	24,375	2	7.96				244,575	
35	222,330	13	3.27	29,100	3	6.90				251,430	
36	918,756	8	9.58	36,000	3	7.22				954,756	
37	285,300	12	3.13	47,600	3	7.48				332,900	
38	674,700	1	5.39	67,500	3	7.53				742,200	
39	794,550	1	5.33	96,000	3	8.07				890,550	
40	1,551,000	1	7.57	123,000	2	7.81				1,674,000	
41	1,787,100	1	7.65	143,400	3	7.70				1,930,500	
42	1,929,000	1	7.12	166,200	2	7.69				2,095,200	
43	2,106,000	1	7.23	177,600	2	7.51	9,600	24	1.60	2,293,200	
44	2,341,200	1	6.90	216,000	2	7.68	19,600	21	2.45	2,576,800	
45	2,671,500	1	6.57	261,000	2	7.53	28,800	17	2.40	2,961,300	
46	3,321,000	1	6.38	342,000	2	7.39	74,400	14	2.81	3,737,400	522,340
47	4,933,800	1	6.33	543,000	2	7.80	166,400	16	2.73	5,643,200	658,322
48	4,397,100	1	6.12	516,300	2	7.61	201,400	9	3.27	5,114,800	715,947
49	4,282,500	1	5.98	511,800	2	7.61	242,900	12	2.99	5,037,200	756,609
50	4,473,600	1	5.56	558,000	2	6.69	320,400	8	2.83	5,352,000	938,165
51	4,866,000	3	4.95	666,900	2	4.03	390,000	16	2.52	5,922,900	909,716
52	6,084,000	2	4.92	841,800	2	5.77	621,100	11	2.66	7,546,900	1,148,528
53	7,311,000	2	4.94	1,058,100	2	5.71	1,080,400	12	3.02	9,449,500	1,596,723
54	8,271,900	2	5.10	1,258,500	2	7.02	1,412,000	15	2.90	10,942,400	1,855,303
55	8,238,300	2	5.14	1,297,800	2	6.93	1,437,000	15	2.83	10,973,100	1,774,050
56	8,733,000	2	5.48	1,419,300	2	7.64	1,445,000	13	2.81	11,597,300	1,778,912
57	9,438,000	2	5.70	1,394,400	2	7.04	1,316,000	18	2.29	12,148,400	1,962,434

年 度	砂 防			地すべり対策			急傾斜地崩壊対策			合 計 事業費 (千円)	直轄事業 負担金 (千円)
	事業費 (千円)	全国の 順 位	全国の 事業費 対比(%)	事業費 (千円)	全国の 順 位	全国の 事業費 対比(%)	事業費 (千円)	全国の 順 位	全国の 事業費 対比(%)		
58	8,991,000	2	5.69	1,397,100	2	7.10	1,369,300	17	2.55	11,757,400	2,057,005
59	8,748,900	2	5.60	1,371,900	2	6.83	1,316,000	20	2.44	11,436,800	1,983,157
60	9,299,100	2	5.73	1,685,400	2	8.02	1,444,400	19	2.38	12,428,900	2,407,983
61	9,771,504	2	5.69	2,239,500	2	9.33	1,519,400	16	2.56	13,530,404	2,634,251
62	11,680,415	2	5.56	2,747,000	5	5.11	1,789,328	21	2.29	16,216,743	4,000,929
63	10,926,000	2	5.26	2,286,800	2	5.87	1,842,000	18	2.49	15,054,800	3,754,987
平成元	10,460,600	2	4.60	2,999,500	4	6.07	1,913,040	17	2.46	15,373,140	3,787,873
2	11,604,000	2	5.06	2,451,400	3	4.09	1,968,000	17	2.47	16,023,400	3,659,549
3	10,501,866	2	4.70	3,346,506	3	6.47	2,179,834	17	2.64	16,028,206	3,455,461
4	13,261,880	2	4.58	3,216,700	3	5.83	2,801,700	17	2.82	19,280,280	4,412,251
5	17,563,840	2	5.18	6,319,353	3	8.58	3,655,150	15	3.18	27,538,343	4,537,497
6	12,289,000	2	5.08	4,452,550	3	7.78	2,475,300	17	2.71	19,216,850	3,878,940
7	32,984,000	2	9.80	15,088,900	2	17.99	4,009,330	15	3.03	52,082,230	5,796,858
8	15,103,401	2	5.53	3,212,600	2	6.15	3,183,950	13	2.98	21,499,951	4,446,653
9	13,924,490	2	5.48	2,659,200	3	5.76	2,951,000	14	2.92	19,534,690	4,127,408
10	24,155,000	2	7.54	7,627,000	2	13.10	5,516,500	12	3.76	37,298,500	6,904,994
11	21,518,900			10,697,333			4,975,800			37,192,033	5,718,849
12	17,416,000			7,014,000			4,538,739			28,968,739	4,324,570

(注意事項)

1 事業費について

- (1) 砂防・地すべり対策費は事業費で、また急傾斜地崩壊対策事業費は補助基本額で登載した。
- (2) 昭和20年度から平成10年度までは、「平成11年度版砂防便覧」の離島を除いたものを使用した。
- (3) 平成12年度は12月補正後の県予算数値を使用した。

2 全国の事業費対比割合については、各事業全額に対する割合である。

3 全国の順位

- (1) 砂防事業については、昭和20年度から44年度までは通常砂防事業で、また昭和45年以降は全事業費で比較した。
- (2) 地すべり対策事業及び急傾斜地崩壊対策事業は、それぞれ各事業全額で比較した。

12 砂防のあゆみ

(全 国)

西 暦	年 月 日	事 項
1868	明治元年	太政官に「治河使」を設置。
1869	明治 2	太政官「治河使」を民部省土木司と改称。
1871	明治 4	近畿各府県および伊賀国に「砂防五ヶ条」を布達。
1872	明治 5	オランダ技師のファン・ドールン、ヨハネス・デ・レイケなどの来日。(1901年帰国) 河川改修、砂防、港湾などの企画・設計に従事。
1873	明治 6	「淀川水源砂防法」(砂防法の基礎)を通達。
1878	明治11	初めて直轄砂防工事に着手(木曾川、淀川)
1881	明治14	初めて府県砂防工事に着手。(山梨県)
1896	明治29	「河川法」の制定。
1897	明治30	「砂防法」、「森林法」の制定。
1898	明治31	「砂防法」に基づく補助砂防事業開始。(補助率1/2 長野、岐阜、滋賀、岡山の4県)
1900	明治33	東京帝国大学に砂防工学講座を設置。
1910	明治43.10	内閣に内務大臣を会長とする「臨時治水調査会」が設置され、「砂防計画に関する件」を決議。
1911	明治44	「第一次治水計画」臨時治水調査会の答申により策定
1913	大正 2	補助砂防事業の補助率が1/4となる。(当時2府17県実施) 「砂防法、森林法適用上の調和に関する件」の制定
1924	大正13	関東大震災。(震災対策砂防工事着手)

(長野県)

西 暦	年 月 日	事 項
1847	弘化 4. 3.24	善光寺地震（茶臼山地すべりの契機となる 明7.4） 岩倉山の抜けが犀川に天然ダムを形成、欠壊し、善光寺平洪水。 倉並の抜けは22戸を埋没し、60人の死者を出した。 虫倉山中腹の裸岩の崩落により45名の死者を出した。
1879	明治12	信濃川の直轄砂防工事着手。（犀川、千曲川）
1880	明治13	オランダ技師の指導により木曾川支流蘭川（現 木曾郡南木曾町）に直轄工事施行、これが本県における砂防工事の発祥といえる。
1881	明治14	千曲川支川佐野川（更埴市）、浅川（長野市）、岡田川（篠ノ井）に直轄工事施行。 犀川沿い、土尻川支川が地すべり防止工として直轄工事施行。
1883	明治16	蜂ヶ沢（生坂村）直轄工事施行。
1884	明治17	山布施沢 直轄工事施行。
1885	明治18	牛伏川 直轄工事施行。
1886	明治19	富吉（小川村）地すべり防止工として直轄工事施行。
1898	明治31	茶臼山地すべり発生。（900万 m ³ ） 「砂防法」に基づく補助事業（1 / 2）牛伏川 県内に初めて着手。 茶臼山、犀川中心部、土尻川、裾花川、浅川、姫川右岸補助砂防事業として地すべり防止工事施行。
1904	明治37	補助事業で夜間瀬川等の石積堰堤施行。
1910	明治43. 8.11	大雨により県下全域に被害。
1911	明治44	稗田山大崩壊、姫川を堰き止める、来馬一帯で大災害。
1917	大正 6	砂防設備区域調査費29,572円計上し、調査実施。
1918	大正 7	千曲川砂防費（但し犀川でも継続実施）として予算計上される。（それまでは信濃川改修費の一部） 信濃川上流筋砂防工事開始。（5ヶ年間） 岡田川、横湯川、女鳥羽川、梓川の直轄工事着手。
1919	大正 8	犀川支流薄川の直轄工事着手。
1921	大正10	犀川支流木沢川の直轄工事着手。
1927	大正12. 6	木曾谷集中豪雨土石流災害発生。 信濃川上流筋砂防工事 9ヶ年継続事業として継続実施。
1929	大正14	木曾川上流域上田沢等に補助事業開始。

(全 国)

西 暦	年 月 日	事 項
1932	昭和 7	政府は農村経済救済のため、救農土木事業を実施。 (流路工工事が全国的に活発になる)
1933	昭和 8	信濃川水系砂防工事事務所設置。 政府「土木会議」設置。 補助砂防事業の補助率 2 / 3 に引き上げられる。(農業国救済事業との連携)
1935	昭和10	全国治水砂防協会発足。
1937	昭和12	砂防事業の中に地すべり対策事業が明確に予算計上された。
1938	昭和13	内務省土木局に第三技術課(砂防担当)設置。(赤木正雄課長) 砂防全体予算の閣議決定。(砂防事業の基礎確立) 六甲山系で大災害発生。
1939	昭和14	各府県に砂防課設置始まる。(長野 3 月、岐阜、三重、京都、兵庫、岡山、広島は 4 月)
1940	昭和15	内務省土木局と改め第三技術課廃止。
1945	昭和20	枕崎台風。 内務省国土局に砂防課設置。
1946	昭和21	赤木正雄氏、貴族院委員に勅選される。
1947	昭和22. 4 9	砂防事業調査(補助)実施。(群馬、長野700千円) カスリーン台風。 能生町「柵口地すべり」発生。
	10	「災害救助法」制定。
	12	内務省国土局砂防課、建設院水政局砂防課に昇格。
1948	昭和23	内務省廃止され、建設省となる。 建設省河川局砂防課となる。
1949	昭和24	「砂防事業全体計画(10ヶ年計画)」を策定。(総額3,400億円) 「第一次治水事業5ヶ年計画」の策定。(砂防761億円) 災害防除対策砂防(補助)を岩手他4県で8,000千円をもって実施。

(長野県)

西 曆	年 月 日	事 項
1932	昭和7	夜間瀬川砂防事務所設置。 赤木正雄博士の計画による夜間瀬川、横湯川流路工施工。 救農土木事業としての砂防事業、44溪流で実施。
1934	昭和9	長野県治水砂防協会発足。
1936	昭和11	梓川に赤木正雄博士の手による、わが国初めてのアーチダム釜ヶ淵上流ダム建設。 天竜川（小渋川）直轄砂防工事着手。
1937	昭和12	
1938	昭和13	長野県行政調査会の中に治水調査会設置。
1939	昭和14. 3. 1 4.21 6. 1	土木部に砂防課設置。（それまでは河川課砂防係） 親沢の崩壊、姫川を堰き止める。 犀川、千曲川、鹿塩川砂防事務所設置。 災害対策砂防工事計画調査を実施。
1941	昭和16	信濃川砂防費（犀川）として予算計上。（それまでは千曲川砂防費）
1942	昭和17. 3	土尻川・姫川両砂防事務所設置。
1943	昭和18.11	夜間瀬川砂防事務所廃止。
1944	昭和19. 5	鹿塩川砂防事務所廃止。
1945	昭和20. 6.26	砂防課は施設課に統合される。
1946	昭和21. 5. 1 7	砂防課再設置。 千曲川砂防事務所廃止。 茶臼山地すべり発生。 中部地建天竜川工事事務所設置。
1947	昭和22 4	茶臼山地すべり機構調査開始。（国補1／2） 新潟、富山、長野県「三県地すべり対策協議会」結成。 砂防事業調査（補助）実施。 天竜川工事事務所を設置。
1948	昭和23	三県地すべり対策協議会は、全国地すべり対策協議会に発展。 高瀬川直轄砂防工事開始。 信濃川水系砂防工事事務所となる。 天竜川改修工事事務所と改称。
1949	昭和24	長野県砂防全体計画、樹立。 キティ台風により県下全域に被害、これを契機に土木行政組織拡充が行われた。 上高井郡豊洲村（現須坂市）で「災害救助法」初めて適用される。
1950	昭和25. 8	下高井郡山ノ内町角間川の堤防欠壊、穂波温泉流出。

(全 国)

西 曆	年 月 日	事 項
1951	昭和26	災害防除対策砂防（補助）を完了。 新規荒廃砂防を秋田県他5県で1.7億円をもって開始。
1952	昭和27	初めて地すべり対策事業、地財法に基づいた補助事業となる。長野県他14県。 我が国初めての三次元砂防ダムに着手。（石川県尾添川御鍋ダム）
1953	昭和28	緊急砂防事業の実施。 内閣に「治山、治水対策協議会」設置。 「治山治水基本対策要綱」策定。（総額1兆8,650億円、うち砂防3,825億円） 「砂防事業全体計画（10ヶ年計画）」改訂。
1956	昭和31	特別失業対策事業による砂防事業の開始。 治水事業5ヶ年計画策定。（砂防824億円）
1958	昭和33	「地すべり防止法」制定。 北陸地方建設局開設。
1959	昭和34	「特殊緊急砂防事業」開始。 伊勢湾台風により全国的に大災害。
1960	昭和35	「治山治水緊急措置法」、「治水特別会計法」の制定。 土木研究所に新潟試験所設置。 「治水事業10ヶ年計画」（砂防1,770億円）の策定。
1961	昭和36	「災害対策基本法」制定。
1962	昭和37	河川局に砂防部設置。 林野庁治山課と建設省砂防課との交換人事開始。
1964	昭和39	荒廃砂防事業、予防砂防事業の開始。 土木研究所に地すべり研究室設置。 「新河川法」の制定。
1965	昭和40	「治水長期構想」を策定し、「第2次治水事業5箇年計画」を決定。 （砂防1,780億円）
1966	昭和41	山梨県足和田村で土石流災害発生、これを契機に「土石流発生危険溪流調査」実施。（43万戸、15,645溪流）
1967	昭和42	「急傾斜地崩壊対策事業」（補助）の開始。 「富士山大沢崩対策懇談会」発足。
1968	昭和43	「緊急急傾斜地崩壊対策事業」開始。
1969	昭和44	「第3次治水事業5ヶ年計画」の決定。（砂防3,150億円） 「急傾斜地の崩壊による災害の防止に関する法律」の制定。 「急傾斜地崩壊危険区域指定基準」、「急傾斜地崩壊防止工事の技術基準に関する細部要綱」の策定。 「急傾斜地崩壊対策事業の全体計画」等の策定。（7,400ヶ所 610億円）
1970	昭和45	河川局砂防部に地すべり対策室設置。土木研究室に急傾斜地崩壊研究室設置。
1971	昭和46	土木研究所に砂防部設置。

(長野県)

西 曆	年 月 日	事 項
1951	昭和26	天竜川水系三峯川で直轄砂防事業開始。
1952	昭和27	茶臼山等に補助地すべり対策事業開始。
1953	昭和28	6月の台風2号、7月豪雨、9月の台風13号など連続的災害で凶作となる。 天竜川工事事務所に改称。
1959	昭和34. 8	台風7号により県下全域大災害。 皇太子殿下（現 天皇）小県郡長門町一帯の被災地視察。 岸首相、被災地視察。（県庁に現職総理が来たことは初めてである）
1960	昭和35. 3	天竜川水系片桐松川流域直轄砂防事業に着手。 治山治水緊急措置法に基づき「第一次5ヶ年計画」樹立。
1961	昭和36	集中豪雨による伊那谷大災害、県内外から百数十名の応援を受ける。大鹿村大西山大崩壊。
1962	昭和37	天竜川水系大田切川、中田切川、与田切川直轄砂防事業開始。 姫川水系（北陸地建）で直轄砂防事業開始。
1964	昭和39	昭和天皇、長野県植樹祭の折、茶臼山を視察。天皇陛下が砂防現場を視察したのは初めてである。
1965	昭和39. 4	松本砂防工事事務所に改称。 松代群発地震発生。（茶臼山地すべり活発となる、牧内地すべり等発生）
1966	昭和41. 6	大型砂防ダム調査建設に着手。（鳴岩ダム） 集中豪雨により木曾郡南木曾町に被害。
1967	昭和42	大型砂防ダム、本格的となる。 天竜川上流工事事務所と改称。
1968	昭和43	急傾斜地崩壊対策事業（補助）として、上高井郡山ノ内町星川1,200万円で実施。
1970	昭和45	県単急傾斜地崩壊対策事業実施。
1971	昭和46	姫川流域小土山崩壊性地すべり発生。

(全 国)

西 曆	年 月 日	事 項
1972	昭和47	「第4次治水事業五箇年計画」の決定。(砂防6,100億円) 土石流、地すべり、がけ崩れ危険箇所総点検実施。(土石流34,747、地すべり5,202、 がけ崩れ60,756) 「防災のための集団移転促進事業に係る国の財政上の特別措置等に関する法律」 制定。
1973	昭和48	第1回がけ崩れ防災週間を実施。
1974	昭和49	河川局砂防部地すべり対策室にかえて傾斜地保全課設置。
1975	昭和50	「急傾斜地崩壊対策事業長期計画(51~60年)」策定。 都市対策砂防、砂防環境整備、緊急地すべり対策、特殊緊急地すべり対策の各事 業の開始。
1976	昭和51	「砂防及び地すべり激甚災害対策特別緊急事業」開始。
1977	昭和52	土石流等災害危険箇所の再点検の実施。(土石流62,272、地すべり5,616、がけ崩れ 64,284) 「砂防設備修繕事業」開始。 「第5次治水事業五箇年計画」策定。(砂防1兆700億円)
1978	昭和53	赤倉、代田切川流域土石流災害発生。
1981	昭和56	「砂防事業100年記念事業」全国各地で開催される。
1982	昭和57	「第6次治水事業五箇年計画」策定。(砂防1兆520億円)
1983	昭和58	「災害関連緊急事業」の開始。 「急傾斜地崩壊対策事業五箇年計画」決定。 「土石流災害防止月間」創設される。 建設省砂防部砂防課に「土石流対策官」設置。
1984	昭和59	「公共土木施設災害復旧事業国庫負担法」が改正され、地すべり防止施設、急傾 斜地崩壊防止施設も採択対象となる。 「総合土石流対策モデル事業」開始。(直轄) 「地すべり防止施設修繕事業」開始。 「直轄緊急砂防事業」開始。
1985	昭和60	「雪崩対策事業」補助事業として開始。 「総合土石流対策モデル事業」の補助の拡充。
1986	昭和61	土石流及び地すべり危険箇所の再点検の実施。(土石流70,434、地すべり10,288)
1987	昭和62	「特定火山周辺総合泥流対策事業」実施。 「第7次治水事業五箇年計画」策定。
1988	昭和63	「第2次急傾斜地崩壊対策事業五箇年計画」決定。
1989	平成元年	「火山砂防事業」開始。

(長野県)

西 曆	年 月 日	事 項
1972	昭和47	「急傾斜地崩壊対策五箇年計画」樹立。
1973	昭和48. 4.18	鬼無里村（萩の峯）地すべり発生。
1977	昭和52	天竜川水系遠山川流域直轄砂防事業着手。
1978	昭和53	木曾川水系、滑川、伊那川、与川、蘭川の直轄砂防事業着手。
1981	昭和56. 7	砂防事業100年記念長野大会開催。
1982	昭和57. 8	台風15号により、千曲川上流の佐久、上小地方、諏訪から伊那谷東部に激甚な災害発生。
	9	台風18号により、千曲川支樽川（木島平村）決壊、諏訪湖氾濫、松代温泉団地浸水、八千穂村大岳川鉄砲水発生。
1983	昭和58. 9	台風10号くずれの熱帯低気圧により県下記録的な豪雨となり飯山市で千曲川決壊。
1984	昭和59. 9	長野県西部地震（M6.8）により御嶽山腹大崩壊し、大災害発生。 大滝川を堰き止める。 「砂防及び地すべり激特事業」により工事着手。
1985	昭和60. 7	長野市地附山、集中豪雨により地すべり発生。 災害関連及び激特地すべり対策事業により工事着手。
1987	昭和62	雪崩対策事業飯山市倉本他で工事着手。 「N T T関連事業」開始
1988	昭和63. 4	天竜川水系入谷、此田直轄地すべり防止工事着手。
1989	平成元年	火山砂防事業（補助）開始。犀川砂防事務所50周年記念式典開催

(全 国)

西 暦	年 月 日	事 項
1990	平成 2	ふるさと砂防モデル事業の開始。 流域砂防保全事業の開始。 砂防ダム機能増進事業の開始。 総合雪崩対策モデル事業の創設。
1991	平成 3 3. 6	生活関連重点化枠事業の実施。 雲仙・普賢岳噴火に伴う火砕流、土石流災害。 (財)砂防フロンティア整備推進機構の設立。 土砂災害危険箇所マップ全国で配布
1992	平成 4	「第 8 次治水事業五箇年計画」の策定。 火山噴火警戒避難対策事業の開始。 溪流環境整備計画の策定と事業の開始。 火山土石流対策官の設置。 急傾斜地崩壊危険箇所の再点検公表 (81,850箇所) 雪崩危険箇所の再点検公表 (15,479箇所)
1993	平成 5	特定斜面整備対策官の設置 「第 3 次急傾斜地崩壊対策事業五箇年計画」の決定。 土石流危険溪流の再点検公表 (79,318溪流) 地すべり危険箇所の再点検公表 (11,042箇所)
1994	平成 6	ふるさと砂防事業の開始。
1995	平成 7. 1	兵庫県南部地震発生、神戸市等で激甚な被害発生 溪流再生事業の開始。
1996	平成 8 8.12	情報基盤緊急整備事業の開始 重要交通網集中地区など土砂災害対策の推進 都市山麓グリーンベルト整備事業の開始。 蒲原沢土石流災害発生。
1997	平成 9 9. 7	全国で砂防ボランティア協会が設立。 急傾斜地崩壊危険箇所の再点検公表 (86,651箇所) 針原川土石流災害 雪崩危険箇所の再点検公表 (15,242箇所)
1998	平成10 10. 8	「第 9 次治水事業七箇年計画」策定 地すべり危険箇所の再点検公表 (11,288箇所) 「第 4 次急傾斜地崩壊対策事業五箇年計画」の決定。 福島県西郷村からまつ荘で土砂災害 災害弱者関連施設の全国調査
1999	平成11 6	災害弱者対策の推進 2000年問題全国各地で対応 梅雨前線豪雨により広島市、呉市を中心に土砂災害

(長野県)

西 暦	年 月 日	事 項
1990	平成 2	ふるさと砂防モデル事業を富山尾沢川で開始。 流域砂防保全事業を木曾福島町兎野沢で開始。 砂防ダム機能増進事業を小谷村濁沢で開始。 総合雪崩対策モデル事業を小谷村月岡で開始。
1991	平成 3	長野県砂防課発足50周年記念式典開催 県単地すべり防止施設修繕事業創設 県単急傾斜地崩壊防止施設修繕事業創設 うるおいの斜面整備事業を南木曾町妻籠宿で実施
1992	平成 4	わがまちの斜面整備事業を喬木村で実施。 火山噴火警戒避難対策事業を浅間山、御嶽山で開始。 「雪崩防災シンポジウム」白馬村で開催。 姫川砂防事務所発足50周年記念式典開催。
1993	平成 5	土尻川砂防事務所発足50周年記念式典開催。 栄村青倉地区で県内初の雪崩防止柵を設置。 土石流危険渓流の再点検公表 (3,403渓流)
1994	平成 6	小谷村清水山で地すべり発生。
1995	平成 7	梅雨前線豪雨により長野県北部一帯に甚大な災害発生 災関砂防45渓流、災関地すべり・急傾斜37箇所。 砂防激特12渓流
1996	平成 8 8.12	長野県治水砂防協会設立60周年記念式典開催 長野県砂防ボランティア協会設立 蒲原沢土石流災害発生。
1997	平成 9	都市山麓グリーンベルト整備構想策定を岡谷、諏訪、上諏訪で開始。 「地震と土砂災害シンポジウム」長野市で開催。 「三県5砂防サミット」小谷村で開催。
1998	平成10. 2 3 9	長野オリンピック冬季競技大会開催。 長野パラリンピック冬季競技大会開催。 南信濃村須沢地区で崩壊性地すべり発生 「砂防学会シンポジウム」長野市で開催。
1999	平成11	長野市下石川地区の地すべり等、融雪・豪雨により県内各地で土砂災害発生。

(全 国)

西 曆	年 月 日	事 項
2000	平成12. 3.31	北海道有珠山西側の山麓で火山噴火
	4.27	土砂災害防止法が成立
	7	三宅島雄山噴火・新島、神津島近海で地震発生
	9.11～12	秋雨前線と台風14号に伴う大雨により中部地方で土砂災害

(長野県)

西 暦	年 月 日	事 項
2000	平成12. 6.15 9	長野県土砂災害防止法連絡会を設置 9月豪雨により下伊那郡西部を中心に土砂災害発生

13 長野県の主な災害の概要

1 善光寺地震による災害 弘化4年(1847年)

弘化4年3月24日、長野県西方山地(虫倉山付近)を震源として発生したいわゆる善光寺地震は、マグニチュード7.4の大地震であって、長野県北部から新潟県にかけて甚大な被害を与えた。同地震では、人家の倒壊、火災とともに山崩れ、洪水等に巻き込まれて約12,000人という多数の死者を出し、長野市西方山地に集中的に発生した山崩れは、松代藩領内で約42,000カ所に及んだと記録されている。

大きな山崩れの状況は次のとおりである。

岩倉山の抜け

信州新町祖室の抜け

信州新町柳久保の抜け

長野市七二会倉並の抜け

2 稗田山の大崩壊

稗田山の崩壊は古くから繰り返されていたと見られるが、明治44年8月の大崩壊以後、山容を一変したものである。この大崩壊は、8月9日午前3時、異様な大音響とともに始まったと伝えられる。崩壊土は土石流となって急速に浦川を埋め、姫川へ押し出した。浦川はもとV字状の狭い谷だったが、崩壊後様相を一変し、姫川との合流点附近で川幅60m、一般には200~300mの幅を持つようになった。土石は、原河床から平均150mの高さに達し、姫川合流点では、高さ60m、長さ300m、幅100m余りの天然ダムができ、姫川は上流3kmに渡って湛水し、下里瀬の民家48戸中43戸が床上浸水した。

稗田山はその後、大正元年4月22日、第2回目の崩壊をおこし土石流となって押し出し、来馬集落の民家5戸を倒壊、埋没させた。

3 親沢の崩壊 昭和14年4月(1939年)

親沢の崩壊は、昭和14年4月21日の午前9時半頃、姫川右岸の風張山山腹、姫川河床より約200mの位置から推定650万 m^3 の土砂が崩れ落ちた。このため姫川は完全にせき止められ、上流1.5kmにわたって湛水し、一大湖水となった。また親沢部落では2戸が倒壊、2戸が半壊したが、幸い人命の被害はなかった。国鉄大糸線も350mにわたって線路が埋没した。

4 昭和24年キテイ台風災害(1949年)

昭和24年8月30日から東信地方を中心に全県下を襲った台風は、軽井沢で最大風速30.5メートル、降水量350ミリに達するもので、年間降水量の3分の1が一昼夜で降ったことになる。このため千曲川が各地で氾濫し、南北佐久、上小、上高井方面の被害は、極めて多大なものであった。中でも上高井郡日野村付近で千曲川の堤防が決壊したため、豊洲、相之島、小島380戸が床上浸水し、被害戸数5,400戸、被害人員は実に25,000余名に上った。

また、キテイ台風の爪跡が生々しい9月22日から23日にかけて台風のもたらした前線は、全県的な豪雨

を降らせ、各地に被害をもたらした。ことに裾花川の増水による九反地籍の堤防決壊により、長野市、青木島村、大豆島村、さらに朝陽、柳原、長沼、神郷、鳥居の各村にまで浸水が及び、死傷者88名、被災家屋3,097戸、氾濫面積2,050町歩に達した。

5 昭和34年台風7号災害（1959年）

昭和34年は、本県において多くの災害が発生した。すなわち34年7月6日の集中豪雨は、北佐久地方の一带と、南佐久の一带に大きな被害を与えたが、さらに8月14日の台風7号、9月26日の台風15号は全県にわたって甚大な被害を与えた。

台風7号は、昭和34年8月14日早朝、本土に上陸して日本海へ去るまで僅か3時間半（本県地域の通過は1時間半）という急速度で、しかも上陸後の勢力も衰えることなく、文字どおり「通り魔」の如く、我々の郷土に死者・行方不明者71人、住家の全半壊5,482戸という未曾有の大災害を一瞬のうちに現出した。

6 昭和36年6月の梅雨前線豪雨災害（1961年）

長野県災害史上空前のものとなったこの災害は、その90%が上伊那郡南部から下伊那郡北部にかけての狭い地域に集中的に発生した。昭和36年6月23日以来の梅雨前線による長雨で飽和状態にあった急峻で地質が脆弱な伊那谷の山地は、6月26日から27日にかけての集中豪雨により、いたるところで崩壊、地すべりを起こし、溪流をせき止め流水を蓄積し、一時に決壊放出した。

大西山の大崩壊による土砂は、320万 m^3 に及び、小渋川をせき止めた。その被害は、死者行方不明138人、重軽傷者1,164人、家屋流出・全半壊3,082戸、災害救助法適用3市14町村、罹災者67,521人の大災害となった。

7 松代地震と地すべり 昭和40年8月以降（1965年）

昭和40年8月3日以降、長野県松代町を中心に発生した多数の地震は、松代群発地震として世間の注目を集めた。群発地震発生時から昭和44年3月31日までの総回数は69万8,306回をいう膨大なもので、うち有感地震の回数は松代で62,324回もあった。このため次のような地すべりが発生した。

- 牧内地すべり……………昭和41年9月17日発生
- 西平山地すべり……………昭和41年10月8日発生
- 桐久保地すべり……………昭和41年9月25日発生
- 加賀井地すべり

8 南木曾災害 昭和41年6月（1966年）

昭和41年6月24日、その日は木曾郡南木曾町の人々にとっては全く悪魔のような1日であった。夕方4時半ごろから降り出した雨は、その雨量が1時間105mmという驚異的な降雨となり、上流から押し出された土砂は、推定約300,000 m^3 に及んだ。午後5時40分に出された的確な避難命令によって、幸い人命の被害はなかったが、家屋の流失38棟、半壊浸水111棟、その他公共施設等に被害があった。

9 御岳山の噴火 昭和54年10月28日(1979年)

10月28日早朝、信仰の山として、また木曾節でも有名な御岳山(標高3,063m)が、有史以来の沈黙を破って噴火を始めた。噴火の発見は28日6時頃で、噴煙か雲かはっきりしない状況であったが、8時前には噴火であることがわかった。降灰による被害は御岳に近い木曾・松筑地方が中心で、水道が濁ったり、養殖魚が浮いてきたり、取り入れを前にした信州名物の野沢菜など高原野菜に被害が集中した。

10 宇原川の災害 昭和56年8月23日(1981年)

昭和56年8月15日、南西太平洋上で発生した台風15号は、日本の南海上を北東ないし北北東を進み続け、8月23日4時過ぎ千葉県館山市付近に上陸した。台風は上陸後も勢力が衰えず、須坂地区の日雨量は146mm~167mm、時間最大雨量は43mmに達成した。

崩壊は、23日未明に宇原川源頭部において幅80m~130m、崩壊斜面長40~50m平均崩壊深10~15mの規模で発生した。岩塊と流木は土石流の最初の引き金となり、幅約100m長さ2kmにわたって下流へ押し寄せ、川岸に点在した住家23戸と田畑を一瞬のうちに襲い、住家4戸が流出し10名が死亡、20名が重軽傷を負う大惨事となった。

10-2 その他の56年の災害(1981年)

- 長野市松代町で230世帯が床上浸水し約1,000人が避難した。
- 上田市神畑、大屋地区及びみすず台南団地などで65戸が床上、205戸が床下浸水、神畑団地でも42戸全部が浸水した。
- 下高井郡山ノ内町で夜間瀬川などがあふれ、床上、床下浸水34戸を出したほか、同町宇木では老人が川に流され死亡した。

11 台風10号による災害 昭和57年8月1日~3日(1982年)

台風10号は、7月31日、関東の南海上から東に伸びて停滞していた梅雨前線を刺激し県内各地に大雨を降らせた。このため千曲川上流部の佐久地方、上小地方及び諏訪から伊那谷の東にかけて死者4名、重軽傷者17名、住家の全半壊67棟の激甚な被害が発生した。

11-2 台風18号による災害 昭和57年9月11日~13日(1982年)

台風18号は次第に勢力を強め北上し、11日夜から県内全域に強い雨が降り始め、台風が通過した13日早朝まで降り続いた。雨量は県内全域で日雨量100mm以上となり、特に県の南部及び東部では日雨量200mmを超す大雨となった。このため県内各地で河川が増水氾濫し、死者2名、重軽傷者37名、住家の全半壊16棟、床上、床下浸水5,319棟、また土砂崩れ等による交通止め箇所が120数箇所という大災害となった。

12 台風10号による災害 昭和58年9月28日~29日(1983年)

今回の大雨は県内全域にむらなく降り総雨量は南部と西部で200mm以上その他の地方も130~200mmの大雨となり県内各地で死者10名、重軽傷者47名の大きな被害が発生した。

13 長野県西部地震災害 昭和59年9月14日（1984年）

昭和59年9月14日午前8時48分、長野県木曽郡王滝村付近を震源地点としたマグニチュード6.8規模の地震が発生した。余震も14日から10月3日まで続き、14日、15日両日だけで978回を数えた。（長野地方気象台資料）

震央は、御岳山近くの内陸部の比較的浅いところで直下型地震であった。このため、御岳山の火山噴火物で構成される火山灰・火山砂・れき・軽石・スコリアの薄層の累積した脆弱な土質が、大規模な崩壊を発生させる結果となった。

地震の被害は、木曽郡下のほとんどの町村に及んだが、中でも王滝村の被害は、村内各所で発生した大規模な土砂崩壊と土砂流出により、死者29名、負傷者10名という人的被害をもたらす大惨事となった。

14 長野市地附山地すべり災害 昭和60年7月26日（1985年）

昭和60年7月26日夕刻、長野市街地の北西に位置する地附山（標高733m）の南東傾斜において、斜面長700m、幅400m、深さ60m、想定移動土量360万 m^3 、被害面積25haの大規模な地すべりが発生した。

この地すべりにより、南側末端に位置していた特別養護老人ホーム「松寿荘」で26名の尊い人命が奪われ、南東方向末端の湯谷団地を中心に全半壊家屋64戸、有料道路1.5kmの流失等甚大な被害をもたらし、全国的にも類を見ない大規模な都市型地すべりとなった。

地すべりの発生誘因と考えられる昭和60年の梅雨期の降雨は、累積449mmと平年（230mm）の約2倍に及び、長野地方気象台観測史上第2位に値する異常豪雨であった。

15 山火事 昭和62年4月21日～23日（1987年）

昭和62年4月中旬のはじめは冬型の気圧配置となり、本州付近は東西にのびる帯状の高気圧に覆われ晴天が続いた。県内では空気が次第に乾燥してきて、13日頃から各地とも実効湿度が55%を割るようになり、まず13日午後、中部に異常乾燥注意報が発令された。フェーン現象による気温の上昇も加わり、強風と異常乾燥のため各地に山林火災が発生した。

○ 更埴市

21日9時38分に更埴市桑原地区から発生した山林火災は、強風にあおられて、周辺地区へ拡大、約1kmも離れた峠地区へ飛び火し、住家1棟が全焼した。

○ 上田市・真田町

21日20時20分に上田市住吉地区から発生した山林火災は、吹き上げる強風にあおられて東太郎山山頂付近まで燃え上がり、山の尾根筋を越えて真田町傍陽地区へ延焼した。また、21日22時20分、上田市下之郷地区でも山林火災が発生した。

○ 高遠町

21日11時30分に高遠町長藤地籍の民有林から発生した山林火災は、強風にあおられ山の尾根づたいに広がり延焼を続けた。

16 梅雨前線豪雨災害 平成7年7月11日～12日（1995年）

7月11日昼過ぎから12日昼頃にかけて、梅雨前線の活発な活動により、県北部では時間40mmを超える集中豪雨があった。両日の降水量は、小谷村で389mm、白馬村で332mmに達した。

このため、小谷村、豊野町、信濃町を中心に河川の氾濫、低地の浸水や土砂災害が相次ぎ、死者こそなかったものの、負傷者1名、住家の全半壊151棟、床上、床下浸水591棟に上る大災害となった。

17 蒲原沢土石流災害 平成8年12月6日（1996年）

12月6日午前10時30分頃、蒲原沢で大規模な土石流が発生した。この土石流は、標高1,300m付近の崩壊が引き金になったもので、少なくとも5波にわたって流下した。中でも最も規模の大きかった第1波は、砂防施設等を次々に通過し、姫川本川に到達した。

この土石流の流下によって、建設省、林野庁及び長野県が発注した災害関連事業等の工事現場が直撃され、工事に従事していた14名の尊い人命が失われ、さらに負傷者9名を数える大災害となった。

14 寄稿「長野県の思い出」

このたび、砂防課設置60周年記念誌を発刊するにあたり、昭和60年以降に本県職員あるいは県内の直轄工事事務所職員としての勤務経験があり、現在各分野で活躍されている15名の皆様に「長野県の思い出」を寄稿していただきました。

- | | | | |
|----|--------------------------|----------------------|-----------|
| 1 | 青空にいちばん近い国 | (社)全国治水砂防協会理事長 | 大久保 駿 氏 |
| 2 | 忙中閑有閑中忙有 | (社)全国治水砂防協会理事 | 小 林 英 昭 氏 |
| 3 | アルプスの砂防 | 建設省砂防部長 | 森 俊 勇 氏 |
| 4 | 砂防課の思い出 | 建設省砂防部傾斜地保全課長 | 近 藤 浩 一 氏 |
| 5 | 砂防課60周年に寄せて | 建設省北陸地方建設局企画部事業評価管理官 | 川 田 孝 信 氏 |
| 6 | 姫川直轄砂防30周年と松川流路工 | 日本道路公団技術部調査役 | 坂 井 素 夫 氏 |
| 7 | 長野県での経験や出会いなど | 建設省土木研究所地すべり研究室長 | 綱 木 亮 介 氏 |
| 8 | 豪雪災、砂防100年、土石流災害、砂防学会・・・ | | |
| | | 建設省北陸地方建設局企画部企画調査官 | 森 山 裕 二 氏 |
| 9 | 長野県の直轄砂防に携わって | 福井県土木部砂防課長 | 西 本 晴 男 氏 |
| 10 | 長野県の思い出 | 建設省砂防部傾斜地保全課課長補佐 | 藤 澤 和 範 氏 |
| 11 | 長野県の思い出 | 建設省砂防部砂防課課長補佐 | 長 井 義 樹 氏 |
| 12 | 長野県の思い出 | 沖縄総合事務局開発建設部技術管理官 | 今 井 一 之 氏 |
| 13 | 長野県の思い出 | 建設省北陸地方建設局企画部建設専門官 | 水 野 正 樹 氏 |
| 14 | 長野県の砂防に感謝して | 国営明石海峡公園工事事務所調査設計課長 | 大 坂 剛 氏 |
| 15 | 長野県の思い出 | 山口県下関土木建築事務所工務課 | 森 下 淳 氏 |

(掲載は年齢順とさせていただきます。)



青空にいちばん近い国

(社)全国治水砂防協会

理事長 大久保 駿

この言葉の持つ雰囲気が本当に好きになってしまいました。何ともさわやかで、清浄で誇らしげではありませんか。

長野県の3年間は、居れば居るほど離れ難くなってきました。それはこの「青空にいちばん近い国」、長野県の自然の豊かさとおおらかさのおかげであり、入り込めば気持ちよく、楽しくおつきあいしてくれた長野の人たちのおかげであると思っています。夫婦で「長野のまわし者」になってしまったと言いふらして憚らないのであります。長野を誉められると夫婦で大喜びをしてしまうのですから。

砂防の話にしましょう。着任早々に渋温泉の奥の地獄谷で大崩壊が起きました。吉村知事が「新しい課長さんが来ると災害もついてくるね」とこともなげにおっしゃいました。歓迎していただいたことの表現だと思ったのですが、いやちがう、「長野は災害の常襲地なのだ。これは知事さんが災害に、砂防に理解がある、と言うより、県政の重要課題の1つとお考えなのだ。地附山や西部地震があったばかりだし」と身の引き締まる思いになったことを覚えています。これが最初の2番目の思い出深い印象です（1番目の思い出は内緒）。

吉村知事さんは、長野の砂防予算は日本一だと自らおっしゃる。長野の砂防の歩みと現状、そして長野の厳しい自然環境の現実を十分ご存じでした。実際、補助事業だけなら北海道、新潟に次いで3番目だったのですが、信濃川、姫川、天竜川、木曾川、富士川の直轄事業を入れると断然日本一なのです。当然な事なのでしょう。第4位の県土面積を持ち、大河川が四方八方に流れる山岳県なのですから。

私は長野県に来てみて、長野砂防が日本一であることの所以はもっと別の所にあると思ったのです。それは、伝統に培われた砂防技術の高さであり、誇りを持って育ってきた技術者の力の強さであり、砂防行政をみんなで一丸になって進めようとする気概であります。それでも私は、ことあるごとに「全国の砂防のリードオフマンたれ」と言っていました。他県が長野を見ているのではないか、長野がどうするか見ているのではないか、そして長野がリーダーシップを取ると思っているのではないかと。長野がしっかりすることによって日本全体の砂防の力が高まるのだから、と。「青空にいちばん近い国」にふさわしい、さわやかな砂防を繰り広げていかなければなりません。

長野に来たばかりの頃、長野県砂防課は「進化する砂防」を合い言葉にどんどん新しいことに取り組もうと意欲を燃やしていました。課の中には日本の砂防を引っ張っていこうと言う自負がありましたが、しかし気負いは全くありません。自然に、さわやかに、そして活気がありました。愉快的仲間と、実に楽しく仕事をさせていただきました。私の大きな財産となりました。

121市町村の方々、本当に砂防のことに興味を持っていただき、真剣に考えてくれていました。それだけ、砂防が地域の振興になくてはならない基本的な事業なのですから。現場で、会議で、大会で多くの首長さんとお会いし、そして今でもおつきあいさせていただいていることは本当に嬉しいことです。建設省を退職後、

砂防協会に入り繋がりが継続しているからでもあります。地域の実情に最も精通している首長さん達が砂防に何を望んでいるか、砂防はどのような役割を果たすべきと考えているのか、災害から住民の命を守るのにどんなに苦労しているのかなどを聞き、話し、知ることはものすごく大事なことと思っているのです。これからもこの縁は大事に大事に育てていきたいと思っています。砂防協会です仕事をしているので、この気持ちで全国の首長さんと接したいと思っています。

長野県砂防課が60年を迎えられたのは大変喜ばしいことです。自分達の県土を愛する方々の熱意は素晴らしいものです。多くの方が長野を愛し、長野のために働いてこられ、たくさんの方々の応援もありました。長野は「国民のふるさと」であります。国民の大きな財産であります。これからも素晴らしい「青空にいちばん近い国」であり続けることを願っています。



有 忙 中 閑 有 閑 中 忙 有

(株)全国治水砂防協会

理事 小林 英 昭

砂防会館の地下の「グリル砂防」と歴史的にはどちらが古いのか、私は知りませんが、某県にも「ぐるり砂防」というのがありました（現在もあるのではないかと思います）。宵もよい時刻になると、よく三々五々とお客さんが寄って来ておりました。つまみは豊富とは言えませんが、飲み物の貯蓄は良好なので、きすぐれには好評でした。私もたまに足繁く通いましたが、仕事等に多忙な人達には大変ご迷惑をおかけしたのではないかと反省しているところです。「ぐるり砂防」も閉店間際になりますと、家路を急ぐ人、また職の場にもどる人等色々ですが、中には当時人気の「黄門さま」に会うために小玉を操りに行く人もいました。私もよくその仲間に入れてもらったものです。

休日には、近くの山へ芝刈りにつれていただきました。私は何年たっても初心者でしたが、珍プレーは得意でした。ある日の最初のティーショット、1打目は空振り、心を入れ代えての2打目はドライバーの先っぽに当って、ボールはほぼ真横に飛び、ティーセット目印用の金属製の球に当って、最後に20m近くも飛んだのです。そしてティーショットの位置より約20m後方から第3打目を打つはめになったのです。後進3打です。

またある日のフェアウェイでの出来ごと。先に打った人をまねてバフィーショット、これもまた先っぽに当って、ボールは真横より若干前方にいたカートに命中。この時は幸にもボールは前方に転がったのですが、私はともかく、キャディーさんはとてもたまげていました。

さらに、ある日のグリーンでの出来ごと、急な登りのパター、勢いよく打ったボールはホールの横を素通り、そしてもどりの途中でホールイン。こういう高度なテクニックもあったのです。

楽しかった砂防課でしたが、色々ご迷惑をかけたのではないかと心配しています。酔った勢いで変な事を言ったのではないか、あるいはしたのではないかと、酔が醒めるたびにドキドキしていたものでした。

ぼちぼち、仕事の話もしなくてはならないのですが、所定の字数に迫ってまいりました。

もちろん遊んでばかりいたのではなく、一応、仕事にも合間を見て参画したつもりです。

平成7年の7月、オリンピック関連の業務と長野県治水砂防協会設立60周年記念大会等の準備に追われているさ中、北信一帯を中心とする大災害が発生しました。しかし事務所や関係部局の方々のご努力・ご協力はもちろん大きかったのですが、砂防課職員の一丸となった迅速かつ適確な業務遂行で危機をなんとか乗り切ることができたのです。この時は本当に砂防課の皆さんの底力を感じました。

公私ともに大変お世話になりましたが、とても素晴らしい職場であったと心から感謝しているところです。



アルプスの砂防

建設省砂防部長 森 俊 勇

私は、幸いなことに日本のアルプスに関する直轄砂防事業に三回携わることができました。

最初は、入省当初の山梨県にある富士川砂防工事事務所の調査課です。南アルプスの東側から釜無川に流入する河川の砂防工事の担当でした。釜無川は最上流部が山梨県と長野県の県境になっています。出張所が富士見町にあり、入笠山の雨量計の設置作業や砂防工事のための調査によく行きましたが、出張所の職員の中に猟をやる人がいて、その獲物をよく食べさせてもらいました。日曜日には、ツガダケ（ツガの木の林に生えていますがマツタケとほとんど同じです）採りに寮生と行ったり、事務所にあった木のスキー板と竹のストック、皮のスキー靴を借り、作業着に軍手という出で立ちで白樺湖にスキーに行ったりと楽しい思い出があります。

二回目は、駒ヶ根市にある天竜川上流工事事務所の工務第二課長として南アルプスの西側と中央アルプスの東側の河川の砂防工事に携わりました。

着任早々の仕事は、上村、南信濃村における直轄砂防事業をスタートさせるための遠山川砂防工区（出張所の前身）の開設でした。喬木村から林道を越えて何回も行きましたが、不時宿泊となる事が多く、その都度美味しい焼肉や鍋料理をみんなで啄みながら、議論を重ねておりました。

小波川の上流では、七釜堰堤がまだ工事中でした。ケーソン基礎の堰堤で仮排水トンネルが屢々被災したり、工事用道路が土砂崩れを起こし、片栈道やロックシェードの設計をしたりと手間のかかる堰堤でした。

当時、既に太田切流路工の工事に着手しており、最上流部の床固工の設計や、取水口の協議と共に、下流への流路工の延伸のための調査を行い、橋梁の継ぎ足し延伸工事を実施しました。当時、既に護岸工は河床にある花崗岩の転石を小割して護岸に使用しており、景観的にも強度的にも優れておりましたが、今では転石をそのまま使用する工法になっており時代の移り変わりを感じています。

休日には、家族で菅の台に遊びに行き五平餅を食べたり、ロープウェイで標高2600mの千畳敷まで行ったり、煮カツ丼を食べたのも駒ヶ根に居た時でした。

また、与田切川の流路工の検討を開始しており、河畔にある松林の位置づけ、中央高速自動車道との調整、町の利用計画との調整などを行っておりました。

三峰川の上流で宮林署と調整しながら新規の砂防ダム工事を行うこととして居ましたが、いざ発注できる段階になったら雪のため仕事ができなくなっており、雪国の経験の無いことの反省と、初めて翌債の手続きをとったのもいい経験となりました。

新規で計画していた砂防ダムの予定地の土地所有者が県外の採石業者の人で、用地交渉のため何回も群馬県の万場町に行ったりしたこともありましたが、四月には、技術系の会議を高遠町にある三峰川砂防出張所で開催し、夜桜見物を行う楽しみもありました。

ある日、突然本省から電話があり、将来の事業化を前提に地滑りの調査を開始したらどうかとの指示です。

そのような観点では何も考えていなかったため、大あわてで資料を整え、中部地方建設局と相談を始めました。今では、入谷地区、此田地区が事業化されており、後任者のフォローアップに感謝しています。

三回目は、松本市にある松本砂防工事事務所長として勤務しました。日本アルプスの東側の流域が担当でした。

上高地では上流から運ばれてくる土砂により梓川の河床が上昇し、宿泊施設やキャンプ場が危険になったり、大正池への流入地点では天然林の中に土砂があふれ立木がどんどん枯死してしまいました。そのため梓川の支川からの土石流対策と共にその対策が急がれておりました。既に環境庁との調整が大筋で終了していましたが、蛇籠により護岸工や帯工の施工はできても床固工の了解がなかなか得られません。当方としてもできることは最大限取り組むこととし、氷河期の残存植物であるケショウヤナギの支障木を移植したり、河畔林の中に計画された帯工の袖部の設計に当たり、毎木調査を実施し、直径50cm以上の木を残存させるように設計して施工を進めました。

上高地における砂防工事は、観光客が居なくなる11月下旬から開始します。マイナス30度にもなるようなところでは手袋をしていても力が思うように入りません。次第に仕事が進んできているのは、現場の施工に携わっていただいている方々の努力のお陰です。

近年、山岳愛好家や植物生態学の学者から上高地の砂防工事に対する批判があります。あのすばらしい自然を後世に受け継ぐと共に、多くの人に安心して親しんでもらうための方策を皆さんの知恵で見出してほしいものです。

白馬村で施工中の松川流路工では、溪流釣りの愛好者から当時の砂防工事のやり方に対して厳しい批判を受けました。流路断面を確保するために行う河床整理に当たっては、50cm以上の転石をそのまま現地に残存させることにより、自然の力で自然の河にできるだけ早く戻りやすくなるようにし、床固工については、全断面が魚道としての機能を発揮できるように構造変更して施工しました。

当時は、NTT-A型の事業が施策の目玉となって居ました。種々の議論を経て奈川村村営「野麦峠スキー場」と、白馬村の平川右岸に建設中の「白馬47スキー場」の二カ所で事業を実施することができ一息入れることができました。

平川流路工の第一期工事が竣工することとなり、その記念に白馬村長を4期勤められた横沢前村長に揮毫いただくこととなりました。氏の「はじめに砂防ありき」の碑は現在、平川流路工の最上流部にあたる源堰堤の袂に設置してあります。この言葉は、「砂防工事により松川、平川の両川が安定し、そのお陰で現在の白馬村の発展があるのだ」という村長の持論です。事務所を離れて何年かしてから女房と共に訪問してみたところ、きれいに草が刈られて管理されておりました。今後ともよろしくお願ひしたいと思います。因に「平川流路工」の文字は当時の北陸地方建設局長斎藤尚久氏の揮毫によるものですし、石碑の裏に彫り込まれている「建設省北陸地方建設局松本砂防工事事務所」の文字は私が書いたものです。

以上三回に亘り長野県に関わる直轄の砂防工事事務所に勤務しましたが、それがまた私の事務所勤務経験の全てであります。地形的にも、地質的にも厳しい環境を砂防関係事業により克服され、私の現場経験の故郷である長野県が、今後益々発展されることを祈念しております。



砂防課の思い出

建設省砂防部傾斜地保全課

課長 近藤 浩一

私が長野県砂防課に勤務したのは、平成8年4月からの3年間でした。当時の喫緊の課題は、姫川流域を中心に激甚な被害をもたらした平成7年7月災害の復興と、10年1月に開催される長野冬季オリンピックを支援する砂防や雪崩対策を早期に完成させることでした。7.7災害復興の最中には、8年梅雨出水で再び緊迫する状況を迎えたが、その時は幸い土砂災害は起きず、同年12月、全く予期せぬ気象状況下、蒲原沢で土石流災害が発生しました。またJR大糸線の復旧に対し砂防事業も最大限の支援をし、9年11月に復旧開通の運びとなったが、翌年、激特砂防工事中の現場付近から土砂が流出し、運行中の車輛が乗り上げ脱線するという事故が発生しました。この時はけが人もなく不幸中の幸いでした。地滑りも続発し、横川、濁川、大網、倉下など比較的大規模な地滑りあるいはその兆候が現れ、その都度、観測・情報連絡態勢をとり、役場を中心に関係行政機関やJRも一緒に警戒避難体制を敷きました。この様に、7.7豪雨によって傷つけられた山体の後遺症が頻発した時期でした。

オリンピック関連の基盤整備を進める上で、砂防課も大変重要な役割を果たしました。アルペン競技会場周辺の溪流保全や雪崩対策そして駐車場確保を兼ねた流路工高水敷整備などは見栄えのするものですが、これ以外にきめこまかい関連工事が盛りだくさん出てきました。滑降コースのスタート地点の問題は、環境保護団体を中心に議論を呼びマスコミも大きく取り上げました。その余波なのか、オリンピック関連の砂防工事についての予算書、設計図書等の公文書公開請求が出たり、テレビや週刊誌からも取材が多くありました。我が国で行われる20世紀最期の国際ビックイベントが首尾良く行われるよう、姫川砂防事務所をはじめ土木部職員が日夜奮闘している最中のことであり、そうした事への対応にも相当時間をさかざるを得ない事もありました。

オリンピックは、日本人選手らの活躍により数々のドラマと感動を残し成功裡に終了しましたが、こうした世紀の祭典を基盤整備という裏方からながら、支える仕事に参画出来たことも貴重な経験でした。

千曲川、木曾川、天竜川そしてそれら水源をなす峻険な山々、この美しい信州に全国から多くの人達が訪れる。しかし、災害という厳しい一面は、住んでいる人でないとわからない。侵食という自然輪廻が絶えず、そして、ときおりダイナミックに起こり、地先や下流地域に土砂災害を起こしてきた。長野の砂防の歩みは、牛伏川砂防、薬師沢砂防、木曾川蘭川砂防、稗田山崩れの砂防、夜間瀬川砂防、茶臼山地滑り対策、36災伊那谷砂防などに代表される一級の荒廃地や災害に対して挑戦してきたものであり、また貯水有効利用砂防ダムの展開、扇状地や天井川解消の流路工の建設あるいは安定した斜面を生み出す地滑り対策工事によって、地域の安全と共に水利用、公園等の土地利用などによって地域づくりにも貢献してきました。このような「長野の砂防」に携わってこられた多くの先輩達の足跡を継ぎ、安全、快適、活力ある県土づくり、地域づくりに資する砂防に在任中取り組んで来たつもりですが、これからの砂防は、「美しい信州」、「水源地」であることからより環境に配慮し、地先だけでなく下流での土砂生産、流送の平衡への影響に配慮した事業

展開が求められるでしょう。

昨今、公共事業に対して厳しい目が向けられています。長野県は以前から長野県治水砂防協会を中心に砂防の重要性について幅広く啓蒙活動をしてきています。在任中も、地元の方々が参加した起工式、竣工式、フォーラム等砂防課、事務所、役場各々の職員が工夫をこらした手作りのイベントを数多く開催しましたが、こうした長野の砂防の良き伝統が継がれていくことも、砂防に対する理解を広めていく上で重要である事は言うまでもありません。

公共事業を取り巻く環境、行政改革、財政改革と新世紀を目前に、厳しい現下の時勢ですが、「国土を保全し、土砂災害を防止する」大事な役目のため、長野県砂防課の発展を心より祈念しております。



砂防課60周年に寄せて (私の本省時代の記憶)

建設省北陸地方建設局企画部

事業評価管理官 川 田 孝 信

昭和60年4月に砂防部傾斜地保全課に転勤となった、その年の7月27日、地すべり災害の一報が入り、夕方のテレビのニュースで、突然、動いている地すべりの映像が全国放映された時でした。「地附山の地すべり」です。まさに、実況中継の状態であり、テレビを見ながら「これは何だ」、大変な事態が起きたと感じ、担当は「がけ崩れ」でしたが、この状況を見ながら、土砂災害の怖さをまざまざと見せ付けられ、地すべりを始めとする砂防関係事業の重要性を痛感した出来事でした。以後、私が本省で補助事業を5年間担当しましたが、毎年発生する「土砂災害」の災害申請を大蔵省に持ち込むたびに、この災害が頭を過ぎるのは、私だけではなかったのではと思っています。

その後、私は、62年には砂防課に配置換えになり、補助砂防事業を担当することになりましたが、長野県からは補助砂防の基本的な考え方（計画や事業の性格・背景等）を勉強させていただきました。理由は、長野県はまさに砂防の本家といえますか、砂防に関する事業の大小や工種を問わず、全国で行っている補助事業の縮図と思ったからです。また、私が在籍していた時期は、「地域に根ざした砂防」の始まりのような時期でもあり、毎年、様々な事業が打ち出されていました。この新しい事業においても長野県は初年度での取り組みをいただき、大変なご苦勞をお掛けしたと思っております。特に記憶にあるのは、諏訪地区の角間川のセイフティ・コミュニティモデル事業、長野市内の総合土石流対策モデル事業、松本市郊外の砂防学習ゾーンモデル事業の牛伏川です。これらの事業の実施に当たっては、当時、時間的に余裕がなかったこともあり、色々と無理を言って、資料の作成や地元調整等、砂防課の皆様を困らせていたことが、昨日のこのように思い出され、改めて、恐縮しているところです。

一方、時間外においても、県砂防課や地元の方々のお世話になりながら、砂防部との親善のスキー合宿が毎年、白馬山麓において行なわれていました。これは、確か私が長野県内の事務所に在籍していた、昭和59年の冬から始まったとの記憶がありますが、現在も続いていると聞いております。今、この文を書きながら、頭の中を様々な人の顔や当時の様子が巡っています。いずれも、楽しく、愉快な方々、出来事ばかりであり、未だに多くの方とお付き合いをさせていただいております。

長野県の砂防は、日本の砂防の牽引役を担っております。引き続き、地域に愛される砂防を目指して、更に発展されることを祈念しております。



姫川直轄砂防30周年と松川流路工

日本道路公団技術部

調査役 坂井 素夫

1. はじめに

長野県土木部砂防課設置満60年おめでとうございます。平成3年4月、建設省松本砂防工事々務所に赴任しましたが、当時長野冬季オリンピック開催も決まり、白馬村内松川流路工の事業促進が急務の課題でありました。

また翌平成4年は、姫川水系直轄砂防30周年を迎える節目の年でもありました。

当時、事業促進や30周年記念行事の準備・開催のため、長野県土木部砂防課を始め長野県の皆様方には大変御世話になりました。改めて御礼申し上げます。

2. 綱渡りの松川流路工工事

松川流路工工事は、当時綱渡りの状況でした。毎年大量に発生する工事残土の処理に困難をきわめ、事業進捗が思うにまかせぬ状況でした。

この問題の打開に向けて白馬村、県当局、JR等の支援が得られ、翌年以降大幅な工事促進が可能となり、冬季オリンピック開催に向けての準備体制が進められたのではないかと考えます。関係者の皆様方の御支援に感謝申し上げます。

3. 姫川直轄砂防30周年

30周年記念行事として、「国際アルプスサミット」、「アルプス景観シンポジウム」が開催される事になりました。

「国際交流」と「景観の保全」がテーマで、この開催準備のため、県庁を始め長野県内各建設事務所を御訪ねし、開催主旨説明と参加要請をさせていただきました。

おかげさまで記念行事には、多数の方々の参加を得ることができ、その日夜9時半のNHKニュース全国版でも報道されました。

同時通訳機械の不調など、アクシデントもありましたが、無事終える事ができました。

長野県砂防課の全面的バックアップがなければ、とても成し得なかったのではないかと思います。長野県土木部の皆様方には本当に御世話になりありがとうございました。

4. 次の100年に向けて

新法も成立し、気象状況の変化も著しい中で、砂防課の果たすべき役割、責任はますます重くなるばかりではないかと思いますが、なお一層の御発展、御活躍を祈念いたしまして、御祝いの言葉とさせていただきます。

満60年おめでとうございます。



長野県での経験や出会いなど

建設省土木研究所

地すべり研究室長 網木亮介

砂防課設置60周年、心からお祝い申し上げます。

長野県は私にとって2箇所目の職場でした。昭和54年4月からの1年間は砂防課で、55年4月からの1年間は土尻川砂防事務所でご厄介になりました。この間、公私にわたり、数多くの得難い経験をする事ができ、同時に、諸先輩から種々の場面で貴重なご指導を賜うことができました。極めて僭越な表現ではありますが、現在でもそれらは私の骨格の大きな部分を占めているといっても過言ではありません。後々の私の冷静な分析によれば、元来の怠け者であるため、業務に関しては組織のお荷物になっていたことはほぼ間違いないのですが、砂防の知識もほとんど持ち合わせておらず（初めの赴任地では地すべりのみを担当していました。また、私の有する砂防に関する情報量は、現在に至るまで往時とさほど変わっていません。）、かといって行政的な器用さが身に付いているわけでもない私を、周囲の方々は温かい叱咤激励とともに包み込んでくださいました。

短い間でしたが、幾つか特に印象に残っていることを挙げれば、砂防課の在籍中では御岳山の噴火、土尻川砂防事務所では小川村の味大豆地すべり災害などでしょうか。御岳山の噴火は結果的には小規模に終わりましたが、直後に降灰の状況を調査するために山頂まで登る機会を与えられました。味大豆の地すべりでは、移動中の地すべりの対策の難しさを痛感させられました。また、鮮明なすべり面を目の当たりにすることもできました。

もちろん私的な領域ではもっともっと忘れ難い思い出が数倍多くあります。野球大会、スキー行、限りなく繰り返された飲み会、田植えの経験、タケノコ狩り等々、十指に余ります。まだ多感な時期でしたので、どれもが非常に密度の濃い体験として記憶に蘇ります。そうそう、家内ともその当時に知り合った縁でした。余談ですが、土尻川砂防事務所での最後の3月後半に新婚旅行と相なりましたが、その間、雪融け（この年は記録的な豪雪でした）のため小川村で大規模な地すべりが発生したことを帰国後に知りました。

いろいろと書き連ねましたが、このように充実した2年間、さらにそれ以降今日まで、大変お世話になった皆様方に対しまして、この場をお借りして御礼申し上げます。また、砂防課が今後とも益々充実、発展されることをお祈りし、筆を置くことにします。



「豪雪災、砂防100年、 土石流災害、砂防学会…」

建設省北陸地方建設局企画部

企画調査官 森 山 裕 二

長野県土木部砂防課設置60周年、おめでとうございます。

小生が長野県砂防課に、お世話になりましたのは、昭和56年4月から昭和57年6月までの1年3ヵ月間です。短かったですが、公私ともに、思い出がいっぱい詰まった内容的には、非常に充実した砂防課勤務でありました。

昭和56年と言えば、まず「豪雪」です。着任直後、早速4月に豪雪・融雪災の災害査定があり、査定官の随員の補助員として査定現場へ行きました。この年は、雪による道路管理施設の被災が多く、その中でも、「ガードレール」の被災が非常に多く、通常は採択されない「ガードレール」のみの被災であっても特例的に採択できるということで、「ガードレール」の被災状況を一枚ごと確認するため、延々道路を歩いて、大変だったことを記憶しています。

6月には、「砂防100年」ということで、全国大会はNHKホールで開催され、長野でも県大会が開催され、本省から小藪砂防部長が来賓で挨拶をされました。このとき、合わせて、夜間瀬川が流れる湯田中温泉の金具屋旅館で「長野県歴代砂防課長会議」も開催され、記録係として阿座上氏はじめ大先輩の貴重なお話を聞かせていただきました。（これは、資料として残っているはずです。）

そして、8月23日には小生にとって忘れられぬ災害、台風15号による「宇原川土石流災害」が発生し、10名の方が亡くなられました。（合掌）災害発生直後は、ぬかるみ状態で、土石流発生現地に入れず、1週間位たった後、現地調査に入ったと思います。菅平ゴルフ場から、土石流発生の源頭部の崩壊地へ急な斜面を落ちるように下り、発生源、流下区域、氾濫区域と全長6kmにわたる土石流の軌跡をつぶさに調査しました。調査には、土木研究所から直前に発生した岐阜県の土石流災害調査を終えてこられた池谷砂防研究室長（前砂防部長）と阿部主任研究員、須坂建設事務所青木係長と事務所へ応援で派遣された小生が参加しました。雨に濡れながらの調査で、事務所に戻って風呂が沸いていなくて寒くてふるえていました。

この調査と合わせて、砂防課飯島係長の指導によって、山口（修）氏、尾坂氏、山口（千）氏といった錚々たるメンバーが仙仁川、上入沢も調査し、「宇原川激特砂防計画」を策定しました。この計画については、翌57年5月に松本市で開催された砂防学会で小生が発表させていただきました。調査の県単予算を確保してもらいたくて現地調査終了後、福井砂防幹の自宅に午前零時過ぎに押し掛けご迷惑をかけしました。（すみません。）

災害対応に明け暮れた中、6月から12月までかかって取得した運転免許をみるたび、あの当時のことが思い出されます。



長野県の直轄砂防に携わって

福井県土木部砂防課長 西本晴男

私は、長野県の直轄砂防事業に事務所で5年間、北陸地建と関東地建の本局で3年間携わる機会を与えていただきました。

昭和54年建設省に入り最初の勤務場所となったのが、駒ヶ根市にある天竜川工事事務所でした。社会人として第一歩を踏み出した地でもあり、仕事の面では多少の緊張もありましたが、中央アルプスと南アルプスに挟まれた雄大な自然のなかで、楽しい2年間を過ごさせていただきました。寒冷地に住むのが初めてでしたが、真冬には氷点下15℃にもなる真冬の寒さのなかを自転車通勤したのもよい思い出です。また、朝まだ暗いうちに寮を出て白馬方面のスキー場にも何度か行きましたが、当時は中央自動車道が伊那北ICまでしか開通しておらず、スキーをしている時間より往復に時間がかかった時代でした。

昭和54年は、遠山川出張所が開設された年です。当時遠山川上流に計画されていた、北又川第2砂防ダムの設計について、上司や関係部署の人達といろいろと論議をし、高さ40Mのアーチタイプ構造とする方向で、バイパストネル等の仮設工法も含めて検討をしました。このときの経験が、数年後関東地建富士川砂防工事事務所で高さ50Mの砂防ダムを実現することに生かされたと思っています。他にも、飯島第5砂防ダム、新宮川砂防ダム、太田切流路工等の測量、地質調査、設計等を通じていろいろと勉強させていただきました。

関東地建では、昭和61年頃、釜無川上流部、特に富士見町の広岩流路工の工事が最盛期であったこと、武智川流域への事業展開を検討したことが印象に残っています。

平成5年には、松本砂防工事事務所長として、今度は北アルプスの砂防に携わることになりました。長女が小学校入学、次女が幼稚園入園した場所でもあり、スキー、温泉、紅葉、ハイキング、りんご狩、山菜等々豊かな自然のなかで、家族で思い出多い2年間を過ごすことができました。

当時の事務所の主な課題としては、上高地の本格的な本川対策と松川流路工の促進でした。上高地については、昭和57、58年度の調整費調査をふまえて、昭和62年度に試験施工した帯工に関する4年間の環境影響調査結果をふまえた、委員会での検討、環境庁との調整等を行いました。松川流路工は、白馬村と下流域を守る重要施設であり、5年後に控えていた長野冬季オリンピックに向けての整備促進が大きな命題であったことから、多くの予算を執行するために奮闘する職員の努力に頭が下がる思いでした。また、平成6年10月に、海外からネパール、ニュージーランド、ベネズエラの市長や研究者を招き、全国から多数の参加者のもと、管内8市町村と共同で「国際砂防フォーラムin松本」を開催できたことは貴重な経験です。

以上の他にも、多くの思い出がありますが、長野県で仕事をさせていただける機会を得られましたことに感謝するとともに、今後益々、長野県の砂防事業が発展しますことを心よりお祈りいたします。



長野県の思い出

建設省砂防部傾斜地保全課

課長補佐 藤澤 和 範

昭和61年4月から2年間の短い期間でしたが、長野県の技師として最初の一年間は土尻川砂防事務所、2年目は本庁砂防課に勤務させていただきました。その後は、土木研究所と現勤務先である建設本省で仕事をすることになりましたので、長野県に向かう以前の勤務先であった天竜川上流工事事務所の2年間とあわせて砂防の最前線の貴重な経験となっています。

土尻川砂防事務所では、小川村を担当させていただきました。県単事業の現地測量や調査業務の発注、設計書の作成などが主な業務でした。当時の小川村の建設課長とは砂防と地すべりの要望箇所を調査しましたが、小川村の砂防関係事業を要望に来省された折にお目にかかり感激しました。当時の砂防堰堤の計画箇所や水抜きボーリングの位置の調査を終えた帰り道では集会場では山の幸を用意し地域の住人から話をお聞きしたことや、縄文おやき村がオープンしておやきとそばを食べに行ったこと、工事用車両が前方を塞いでいたためにブレーキをかけると路面が粘性土で滑りやすくなって危うく衝突しそうになったことなど、書き始めるとこれ以外にもありますが、失敗した事と人の恩を受けたことばかりが思い出される事に気づかされています。

砂防課では、建設事務所等からの事業要望を聞くことになりましたが、担当者の砂防への期待と熱い思いが伝わってきました。今の職場になって全国の砂防を担う方々から話しを聞く機会がありますが、地すべり現象の規模や災害の数とともに説明の迫力もあって当時と変わらぬ砂防への期待を感じることができます。今後は、防災事業への投資も他の公共事業と同じく削減されることが予想され、また、国土交通省が発足することもあって、きめ細やかな国土管理が求められます。相互通報、情報基盤、ITや土砂災害防止法の適切な運用などがそのツールになると思います。

災害関連緊急事業の採択状況を見ても、長野県は地すべり災害が頻発しています。安全な地域作りが砂防の本線だと思います。砂防課の益々のご発展を期待します。



長野県の思い出

建設省砂防部砂防課

課長補佐 長 井 義 樹

長野県砂防課の60周年おめでとうございます。

私は、現在までいくつかの勤務地を経験してきましたが、その中でも長野県砂防課は私にとって印象深い勤務地の一つです。

私は、昭和61年に建設省に入省し、関東地建管内の2つの工事事務所に1年づつ勤務の後、昭和63年4月に土尻川砂防事務所に異動になりました。当時の土尻川砂防事務所は臨時職員も含め19人でした。

それまでの2年間は、調査関係の業務だけでしたので、ここではじめて積算、監督、検査等の工事関係の業務を経験しました。

土尻川砂防事務所の1年間も様々な事が思い出されますが、これについては、別の機会に述べさせていただくことにして、今回は砂防課60周年という事で砂防課に在籍した1年間の思い出を述べることにします。

土尻川砂防事務所でお世話になった皆様には、この場を借りて御礼申し上げます。

平成元年4月、砂防課に異動になりました。当時の砂防課は、福井課長はじめ臨時職員等も含め22人でした。その年の11月、福井課長が上田建設事務所長に栄転し、建設省から大久保課長が着任しています。

私は、砂防第一係に配置され、各事務所からのヒアリング、本省でのヒアリングや様々な協議等定常的な業務は、それなりにやっていたのですが、鮮明に覚えていることといえば、この年から火山砂防事業が始まり、同じ係の酒井文男さん（故人）、松橋裕さん、田下昌志さん、私の4人で火山地域を決めるべく管内図を広げて、図上に線を引いて火山地域を決めたことです。

この線引きで決まった地域は、その後に至るまで使われており、当時とはとにかく早く決めようと言うのが一番で、深い考えもなく引いた線（根拠はあったと思いますが）だとは今となっては、誰も知らないでしょう。もう一つの思い出は、雪が降り始めるかと言うような時期だったと思いますが、以前からヘリコプターによる溪流調査を要望していたところ、県警のヘリコプターが使えるということになり土尻川沿いを飛んですべての溪流の斜め写真を撮ったことです。

今では、ヘリコプターを使った流域や災害の調査は普通にやるようになりましたが、当時はヘリコプターによる調査などほとんどやっていませんでしたから、ラッキーチャンスが巡ってきたと喜びました。

また、調査に使った県警のヘリコプターが山岳救助に使われているもので機内に人が横たわれるほどのスペースがあり窓が大きく開き、ソファのようなシートだったことに驚きました。写真は複数枚現像し、溪流ごとにアルバムに整理したのですが、その後はちゃんと活用されているのでしょうか。

仕事とは別に印象的なことと言えば、県庁内自衛消防団員という辞令をもらい、松代にある県消防学校で1泊2日の訓練を受け、県庁の防災訓練ではホースをもって放水したことです。

消防学校の訓練をすべて覚えてはいませんが、煙の中を脱出してくる訓練だけは相当苦しかったのを覚えています。

県庁内のレクリエーションリーダー（正確な名称は忘れました）の1泊2日の研修への参加や、びんずる祭りの県庁連へ砂防課から1人だけ参加したり、市民川祭りでは、犀川のいかだレースに砂防事業ののぼりを立てて参加したりといろんな場面で砂防課のため行動しました。

さらに、私が砂防課のためにもっとも貢献したと自負していること（ものすごく大げさですが）があります。

当時、砂防課には冷蔵庫がありませんでした。砂防課に異動になってから何か物足りないと感じていました。部屋の中に冷蔵庫を置かなければと使命感のようなものにあと押しされて、あるところから（あるところとしか言いようがないのですが）冷蔵庫を調達してきて私の机の横に置きました。

冷蔵庫が置かれていなかった理由の一つが「電気代をそんなものに使ってはいけない」という事だったので、私の机の後ろに柱があり砂防課に入ってきた人から見えにくいところに置いたわけです。設置後は、砂防課のみならず、道路維持課も時々使っていましたので、土木部の一部職員の福利厚生には貢献したと自負しているわけです。現在は、新しいものに更新している事だろうと思います。

実は、もう一つ砂防課に貢献してきたことがあるのですが、詳しく書くと長くなりますので簡単に述べますと、「当時、砂防課のベランダに巣をつくっていた鳩の繁殖を阻止した。」事です。あの場所は、鳩にとっては良い環境なので今はまた鳩がたくさん卵を生んでいることだろうと思います。

冒頭にも述べたように長野県砂防課が印象深い勤務地であったのは、当時、砂防課にその後私の妻となった人物が勤務していたのも理由の一つだと思います。

最後になりますが、当時砂防課でお世話になった皆様に感謝するとともに、長野県砂防課の今後益々のご発展を祈念いたしております。



長野県の思い出

沖縄総合事務局開発建設部

技術管理官 今井 一之

学生の頃、スキーパッキングツアーで友人と白馬・梅池や志賀高原方面に行くことが冬の楽しみのひとつだった。当時は大部屋に雑魚寝が当たり前で、朝からナイターまでスキー三昧、優雅にアフタースキーなどは考えもしなかった。就職してからも勤務地が山梨県であったことから、たびたび出かけたものである。

昭和62年の春、松本砂防勤務となり、今思えばここでの勤務がその後の仕事や生活の大きな転機であったし、銀嶺と清流のイメージから一変した。観光で来た上高地や立山アルペンルートの扇沢駅・麓川付近、そして毎年訪れた白馬連峰北アルプスなどが仕事のフィールドとしての風貌に変わっていったのである。

さて、家族、親戚はもとより友人たちも我が家を訪れてくれた。友人の多くは都合のいいスキー宿と考えていたことだろう。プライベートで案内するときは大体ルートが決まっており、梓川沿いに奈川村に入りそばやに立ち寄ったあと野麦峠、または乗鞍高原から平湯、安房峠から上高地へと向かうルート（逆のルートも）と、近くでは穂高のわさび農園を見学し葛温泉で風呂に入ることが多かった。中でも上高地に入る手前に中の湯監督官詰め所があり、賄いの岡田さんに公私にわたり世話になったことを思い出す。

上高地梓川での砂防工事着手に向け、真冬に釜トンネルを抜けて明神池まで雪をかき分け調査に行ったことや、環境庁中部山岳国立公園管理事務所に何回も足を運んだことなど、当時の手帳を開くと走馬燈のように記憶が蘇ってくる。

この頃家庭を持ち、2年後再び長野県に住む時には家族が4人となっていた。

松本平から伊那谷へ。平成3年の春には、さなぎ、ざざむし、はちのこ、しかさし、いのしし汁とこれまで口にすることがない奇妙な（私にとってはたいへんおいしい）食材に巡り会うことができた。官舎には広い庭があって家庭菜園と化していた。大根、人参、キュウリにトマト、ピーマン、長ネギ…キュウリは油断するとヘチマくらいの大きさになってしまった。木造官舎で真冬は毎朝室温が氷点下になり、子供たちはリノゴのようなほほになっていたが、都会の雑踏から離れて住み易い所であった。

大鹿村の歌舞伎に出かけ、遠山の霜月まつりを見、駒ヶ根在住の写真家宮崎学さんのお宅で伊那谷の自然や動物など様々な話を聞いたことなど、地域と密着した仕事ができ、ここでの生活にも楽しい思い出がたくさんある。

だが、その後の蒲原沢の災害は強烈な印象として残っていることも確かである。

土砂災害の撲滅を心より念願するとともに、いつまでも楽しい思い出を持ちつつ、これからも白馬山麓でスキーをし、大町で湯につかり、高遠の桜を見に行きたいものである。



長野県の思い出

建設省北陸地方建設局企画部

建設専門官 水野正樹

私は入省後3年目の平成6年4月から平成8年3月までの2年間、長野建設事務所関連事業課に在職いたしました。当時は、長野冬季オリンピックの関連事業が盛りをむかえていた頃で、事務所の中は大変活気がありました。この中で私は、長野市内のオリンピック関連道路事業の設計から工事監督までを主に担当しました。担当していた工事箇所は、県道三才大豆島中御所線、今の「五輪大橋」前後の道路新設工事や県道長野真田線の拡幅工事などです。

このうち、三才大豆島中御所線では、経験を積んだ先輩と2人で事業を担当しました。

まず1年目は、新しく築造する道路の計画や基本構造を地元の説明して、地元との合意形成を図りました。このオリンピック関連道路は短い期間で事業を完成させる必要がありましたが、短期間で地元の全ての方の同意を得るのは難しく、なかなか工事を始めることができなかつたことを覚えています。

そして、地元説明会で農作業に影響を与えない農業用水の切り回し方をいろいろ調整したこと、横断地下道の工事の際に豊富な地下水対策を検討したこと、景観を十分に検討して使用する材料・色彩を決めたこと等、初めて携わる道路事業は、何事も私にとって興味深いものでした。

さらに平成7年7月11日には、梅雨前線豪雨による災害が発生しました。この時は、災害が発生するほどの豪雨の緊迫感や鳥居川の氾濫、裾花川の被災状況を目の当たりにして、災害の恐ろしさを実感すると共に、河川災害の査定や災害復旧工事を経験することができました。

このように、諸先輩方にいろいろご指導いただきながら、オリンピック関連事業で地元への計画説明から用地交渉、工法検討、付帯工事の検討、工事監督までを担当し、災害復旧事業にも携わることができました。このことは、いまでも大変貴重な経験となっており、この場を借りましてお礼申し上げたいと思います。

長野県の砂防に感謝して

国営明石海峡公園工事事務所

調査設計課長 大坂 剛

私は、平成7年から9年まで長野県白馬村オリンピック課に勤務した。担当は、クロスカントリー、アルペンコース等に係る用地、計画、調査、工事積算・監督等である。赴任してすぐの平成7年7月11日姫川災害（北信越梅雨前線豪雨災害）があった。その日私は、クロスカントリー現場事務所で打合せを行っていた。午後2時頃から振り出した雨は、いっこうに降り止まない。乗用車で役場へ帰ろうと思っても前が見えない。待機していた現場事務所から小谷、糸魚川方面の空を見ると、生まれてはじめて見る空の色をしていた。ただ事ではないなとその時感じた。役場に連絡し、そのまま現場の監視を続ける、と所在を告げた。次にクロスカントリーは複数の工区に分かれていたので、各現場代理人に連絡をし現場に直行するよう依頼するとともに、重機の手配をお願いした。クロスカントリーコース周辺の集落にも土砂崩れ等の被害がでてきたからだ。夜になり、雨はやむどころか益々強く降り続く。クロスカントリー会場は、山から流れてくる濁流でいつしか川ができていた。仮調整池の工事が終わっていたので、濁流は、調整池で減勢されたが、もしこの調整池がなかったらと思うと今でもゾットする。また現場周辺、特に人家周辺のパトロールや応急対策等を朝まで続けた。雨が峠を過ぎたので、一旦役場へ戻った。役場は混乱していた。これから、避難勧告を解除するか続けるか、各集落に説明に出かけるという。その説明者として私に来て欲しいというのだ。私が行った場所は、ペンション等が中心の集落であった。役場の同僚が私を紹介した。「砂防の専門家にきてもらった。避難解除するかどうか、これから診断してもらうのだ」と。ペンションのオーナーはいう。「今日も明日もお客さんの予約が入っているんだ。いつになったら避難解除できるんだ、こっちは生活がかかっているんだ。」と。無理もない。空は、昨日までの雨が嘘のように全くの晴天となっていたからだ。その際私がどのように住民の方々へ説明したか詳細まで覚えていない。覚えていることはただひとつ、水が流れ続ける崩落斜面を指さし、二次災害の危険性を延々とくり返し説明したことのみ記憶にある。

約54haに及ぶクロスカントリーの現場でも散発的に土砂災害が起こっていた。土石流が発生した小溪流が二箇所、崩壊した斜面は数十箇所にも及び、工事用道路も数箇所にわたり寸断された。7月13日以降、災害の対策に追われた。対策といっても、潤沢な災害対策費が村にあるわけがない。大学生の頃、教科書で読んで重機等のない頃の現地材を活用した砂防工事（丸太柵、粗朶排水等）を自分で図面を書き、積算し、施工業者に指示した。業者は一生懸命施工してくれた。

砂防屋として、白馬村、長野県にお世話になり色々なことを経験させていただいた。姫川災害もしかりであるが、私がのびのびと仕事できたのは、砂防の諸先輩が築き上げた住民の信頼感の中で仕事できたからである。もめている用地交渉などへ行っても、砂防出身だというと、「そうか、砂防の人か」とボンと印を押していただいたこともある。県の砂防に対する村民の信頼感は絶大なものがあつたのではないかと思う。また、長野オリンピックという国家的プロジェクトを実施するにあたり、開催市町村にいて県にお願いする立場にあって、縁の下の方力持ちとして本当にお世話になったと思う。長野オリンピックの成功は、長野県の

砂防に拠るところが大きいといっても過言ではない、と思う。

今現在私は、国営公園の事務所の調査設計課長として勤務している。砂防と公園とでは、だいぶ事業の中身も違う。しかし根本は同じだ。行政に対して住民に信頼感をもっていただくこと。そして住民に行政の行わんとすることをよく理解していただくこと。これが大事なのではないかと思う。長野県の砂防が住民と長年築き上げた信頼感をお手本に業務に勤しんでいきたいと考えている。

最後になりましたが、長野県砂防課設置60周年本当におめでとうございます。



長野県の思い出

山口県下関土木建築事務所

工務課 森下 淳

私が土木事業に関係する仕事をするようになってからちょうど2年と半年ほどになります。長野県白馬村、小谷村で砂防事業に携わったほか、富山県で道路事業（能越自動車道）、山口県で急傾斜地を中心とした各種土木事業に従事してきました。その短い中でも、建設省姫川出張所に勤務した1年間で一番思い出深い1年であります。当時、ちょうど建設省に入省したばかりで現場の事を何も知らない私に、姫川出張所や松本砂防工事事務所の諸先輩が現場のいろはを丁寧に教えてくれたのを、今でもよく覚えています。学生時代は農学部で森林生態系の勉強をしていたため、姫川出張所にきたばかりのとき、土木に関する知識は仕事をするに絶えうるレベルではありませんでした。そのため、日々の業務の中で見る事ややる事すべてが初めての事ばかりで、大変勉強になりました。浦川や松川、平川に砂防ダムや床固めが出来上がっていく様子を眺めていた姫川出張所での1年間は、まさしく自分の土木技術者としてのスタート地点だったと感じています。

このように、初めての現場でいろいろな事を経験した思い出の中でも特に思い出深い事は、「姫川出張所だより」を発刊したことでした。初めは松本砂防工事事務所で働く人たちを対象に、出張所の日常やそれぞれの現場を紹介する広報誌でしたが、次第に各現場や白馬村小谷村の役場にも配るようになりました。砂防事業と言うと、道路事業などに比べ事業に対する受益者が小数であると同時に、工事や事業への一般市民の関心もまだまだ高いとはいえない状況だと思います。そのため、それぞれの工事に関する直接の受益者である地元住民はもちろんのこと、日頃土砂災害や砂防事業に触れる事のない人たちも、積極的な情報発信をしていくべきだと考えています。それらに関する知識が、土砂災害だけでなくそれぞれの自然災害に対する関心を高め、日々の防災に対する姿勢を良い方向へ導く事は言うまでもありません。また、河川の事、土砂災害の事、それを防ぐ各種施策（ハードソフト両面）などについて日頃から関心を持ってもらう事は、われわれ砂防事業に携わる土木技術者にとってもうれしい事ではないでしょうか。さらに、地元住民に対する情報提供を機に、今度は地元からわれわれのもとへ情報提供がなされるかもしれません。それら一般市民からの情報は、日々の仕事の中で大変勉強になるだけでなく、このような双方向性のコミュニケーションに関する能力は、21世紀を築いていく今の時代の技術者には欠かせないスキルであるといえるでしょう。私がわずか半年間だけ発行した「姫川出張所だより」が、これら砂防に関する情報発信に対して貢献しているとはいえませんが、自分が日ごろ考えている事に対し小さな一歩を踏み出せた事が、今でもいい思い出となっています。

毎年毎年多額の予算をつぎ込み砂防事業を推し進めているものの、土砂災害によりその尊い命を失われる人の数がなかなか減ってはいかないというのが現状であります。ハードであれソフトであれ、われわれ砂防に携わる技術者が、これらの土砂災害について考えなくてはならない事はまだまだ多いといえるでしょう。これからもっともっと勉強して、同じく砂防に携わる皆さんと一緒にがんばっていきたいと思います。

15 歴代砂防課長一覽

代	在職期間	職名	氏名	摘要
1	昭和14. 3. 1~ 15. 9. 24	土木技師・道路技師	遠藤 佐五右衛門	河川課砂防係から独立
	15. 9. 25~ 16. 3. 4	土木部長兼務		
2	16. 3. 5~ 20. 6. 24	土木技師・道路技師	和田 嘉六	
	20. 6. 25~ 21. 4. 30	施設課に統合		
3	21. 5. 1~ 27. 3. 31	地方技官	水野 鉉三	再設置
4	27. 4. 1~ 30. 6. 30	長野県技術吏員	矢野 義男	
	30. 7. 1~ 30. 8. 31	土木部長兼務		
5	30. 9. 1~ 36. 10. 15	長野県技術吏員	木村 三郎	
6	36. 10. 16~ 41. 1. 31	〃	阿座上 新吾	
7	41. 2. 1~ 48. 7. 31	〃	松林 正義	
8	48. 8. 1~ 52. 6. 6	〃	広瀬 潔	
9	52. 6. 20~ 56. 7. 31	〃	関戸 研一	
10	56. 8. 1~ 60. 3. 31	〃	上条 喜	
11	60. 4. 1~ 平成元. 10. 31	〃	福井 則八	
12	元. 11. 1~ 4. 9. 21	〃	大久保 駿	
13	4. 9. 22~ 8. 3. 31	〃	小林 英昭	
14	8. 4. 1~ 11. 3. 31	〃	近藤 浩一	
15	11. 4. 1~ 現在に至る	〃	坂口 哲夫	

16 歴代土木部長・土木技監一覧

土木部長

代	氏名	在職期間	摘要
1	野田六次	明治40. 8. 10 ~ 大正 3. 9. 26	内務部土木課長
2	西池氏文	大正 3. 9. 26 ~ 大正13. 12. 20	
3	浅見洋	大正13. 12. 20 ~ 昭和 2. 8. 31	
4	菅良二	昭和 2. 8. 31 ~ 昭和 5. 6. 30	
1	児玉静雄	昭和 5. 6. 30 ~ 昭和 8. 9. 30	土木部長となる。
2	岩崎雄治	昭和 8. 10. 7 ~ 昭和10. 9. 4	
3	土肥憲二郎	昭和10. 9. 4 ~ 昭和13. 1. 21	
4	城戸鎖吉	昭和13. 1. 21 ~ 昭和14. 6. 6	
5	杉山宗次郎	昭和14. 6. 6 ~ 昭和17. 11. 1	
6	熊田隆治	昭和17. 11. 1 ~ 昭和21. 3. 18	
7	田中孝	昭和21. 3. 18 ~ 昭和25. 3. 31	
8	長久保信夫	昭和25. 3. 31 ~ 昭和29. 6. 30	
9	紙谷斉治	昭和29. 7. 1 ~ 昭和32. 9. 15	
10	穂積健茂	昭和32. 9. 16 ~ 昭和35. 4. 30	
11	小林武雄	昭和35. 5. 1 ~ 昭和41. 3. 31	
12	和田良雄	昭和41. 4. 1 ~ 昭和43. 5. 31	
13	小川一	昭和43. 6. 1 ~ 昭和47. 11. 1	
14	長谷川五郎	昭和47. 11. 1 ~ 昭和49. 4. 30	
15	小林博憲	昭和49. 5. 1 ~ 昭和53. 6. 1	
16	大工原潮	昭和53. 6. 2 ~ 昭和56. 4. 30	
17	渡辺恭平	昭和56. 5. 1 ~ 昭和58. 3. 31	
18	清水昭邦	昭和58. 4. 1 ~ 昭和61. 3. 31	
19	宮田浩邇	昭和61. 4. 1 ~ 平成元. 3. 31	
20	野村和正	平成元. 4. 1 ~ 平成 4. 3. 31	
21	住田陸快	平成 4. 4. 1 ~ 平成 6. 3. 31	
22	安井常二	平成 6. 4. 1 ~ 平成 8. 3. 31	
23	太田柳一	平成 8. 4. 1 ~ 平成10. 3. 31	
24	小川健	平成10. 4. 1 ~ 平成12. 3. 31	
25	光家康夫	平成12. 4. 1 ~ 現在に至る	

土 木 技 監

代	氏 名	在 職 期 間	摘 要
1	川久保 寛	昭和50. 5. 6 ~ 昭和52. 3. 31	兼都市計画課長
2	広 瀬 潔	昭和52. 4. 1 ~ 昭和52. 6. 7	兼砂防課長
3	片 桐 博	昭和52. 10. 1 ~ 昭和56. 3. 31	兼道路建設課長
4	関 戸 研 一	昭和56. 4. 1 ~ 昭和56. 7. 31	兼砂防課長
5	宮 坂 博 敏	昭和57. 4. 1 ~ 昭和57. 6. 30	兼道路建設課長
1	宮 坂 博 敏	昭和57. 7. 1 ~ 昭和59. 3. 31	専任制となる。
2	田 内 猛 彦	昭和59. 4. 1 ~ 昭和62. 3. 31	
3	春 原 遥 一 郎	昭和62. 4. 1 ~ 平成 2. 3. 31	
4	野 本 義 正	平成 2. 4. 1 ~ 平成 4. 3. 31	
5	宮 島 茂	平成 4. 4. 1 ~ 平成 6. 3. 31	
6	太 田 柳 一	平成 6. 4. 1 ~ 平成 8. 3. 31	
7	平 澤 幸 雄	平成 8. 4. 1 ~ 平成10. 3. 31	
8	竹 中 照 輝	平成10. 4. 1 ~ 平成12. 11. 23	

17 建設省砂防部歴代部長・課長一覽

砂 防 部 長

代	氏 名	在 職 期 間	摘 要
1	矢 野 義 男	昭和37. 4. 1 ~ 昭和41. 2. 1	
2	木 村 正 昭	昭和41. 2. 1 ~ 昭和44. 1. 16	
3	木 村 三 郎	昭和44. 1. 16 ~ 昭和46. 8. 25	
4	阿座上 新 吾	昭和46. 8. 16 ~ 昭和48. 7. 31	
5	谷 勲	昭和48. 8. 1 ~ 昭和50. 7. 31	
6	松 林 正 義	昭和50. 8. 1 ~ 昭和51. 11. 1	
7	中 村 二 郎	昭和51. 11. 1 ~ 昭和54. 10. 1	
8	小 藪 隆 之	昭和54. 10. 1 ~ 昭和56. 8. 1	
9	釣 谷 義 範	昭和56. 8. 1 ~ 昭和57. 9. 1	
10	近 森 藤 夫	昭和57. 9. 1 ~ 昭和58. 9. 1	
11	矢 野 勝 太 郎	昭和58. 9. 1 ~ 昭和61. 4. 1	
12	成 田 久 夫	昭和61. 4. 1 ~ 昭和63. 4. 1	
13	友 松 靖 夫	昭和63. 4. 1 ~ 平成 3. 6. 14	
14	松 下 忠 洋	平成 3. 6. 14 ~ 平成 4. 6. 26	
15	益 子 恵 治	平成 4. 7. 6 ~ 平成 6. 11. 1	
16	大久保 駿	平成 6. 11. 1 ~ 平成 8. 4. 1	
17	田 畑 茂 清	平成 8. 4. 1 ~ 平成10. 7. 1	
18	池 谷 浩	平成10. 7. 1 ~ 平成12. 4. 15	
19	森 俊 勇	平成12. 4. 16 ~ 現在に至る	

砂 防 課 長

代	氏 名	在 職 期 間	摘 要
1	赤 木 正 雄	昭和13. 8. 12 ~ 昭和16. 9. 6	
2	伊 藤 剛	昭和20. 11. 20 ~ 昭和23. 1. 1	
3	伊 藤 令 二	昭和23. 2. 27 ~ 昭和23. 6. 24	
4	田 中 精 一	昭和23. 6. 24 ~ 昭和25. 5. 15	
5	木 村 弘 太 郎	昭和25. 7. 31 ~ 昭和30. 9. 30	
6	戸 田 福 三 郎	昭和30. 10. 16 ~ 昭和34. 6. 16	
7	荒 尾 茂	昭和34. 6. 16 ~ 昭和36. 6. 15	
8	矢 野 義 男	昭和36. 6. 16 ~ 昭和37. 4. 1	
9	木 村 正 昭	昭和37. 4. 1 ~ 昭和37. 8. 15	
10	木 村 晴 吉	昭和37. 8. 16 ~ 昭和39. 9. 1	
11	木 村 正 昭	昭和39. 9. 1 ~ 昭和41. 1. 31	
12	倉 上 靖	昭和41. 2. 1 ~ 昭和43. 7. 1	
13	田 中 憲 一	昭和43. 7. 1 ~ 昭和45. 1. 10	
14	阿 座 上 新 吾	昭和45. 1. 10 ~ 昭和46. 8. 15	
15	谷 勲	昭和46. 8. 16 ~ 昭和49. 7. 31	
16	松 林 正 義	昭和48. 8. 1 ~ 昭和50. 7. 31	
17	中 村 二 郎	昭和50. 8. 1 ~ 昭和51. 10. 31	
18	大 工 原 潮	昭和51. 11. 1 ~ 昭和53. 6. 1	
19	小 藪 隆 之	昭和53. 6. 2 ~ 昭和54. 9. 30	
20	釣 谷 義 範	昭和54. 10. 1 ~ 昭和56. 7. 31	
21	近 森 藤 夫	昭和56. 8. 1 ~ 昭和57. 8. 31	
22	矢 野 勝 太 郎	昭和57. 9. 1 ~ 昭和58. 8. 31	
23	設 楽 武 久	昭和58. 9. 1 ~ 昭和60. 3. 31	
24	成 田 久 夫	昭和60. 4. 1 ~ 昭和61. 3. 31	
25	友 松 靖 夫	昭和61. 4. 1 ~ 昭和63. 3. 31	
26	松 下 忠 洋	昭和63. 4. 1 ~ 平成 3. 6. 13	
27	高 橋 哲 雄	平成 3. 6. 14 ~ 平成 4. 9. 21	
28	大 久 保 駿	平成 4. 9. 22 ~ 平成 6. 10. 31	
29	田 畑 茂 清	平成 6. 11. 1 ~ 平成 8. 3. 31	
30	池 谷 浩	平成 8. 4. 1 ~ 平成10. 6. 30	
31	小 林 英 昭	平成10. 7. 1 ~ 平成11. 6. 30	
32	岡 本 正 男	平成11. 7. 1 ~ 現在に至る	

傾斜地保全課長

代	氏 名	在 職 期 間	摘 要
1	大工原 潮	昭和49. 4. 11 ~ 昭和51. 10. 31	
2	釣 谷 義 範	昭和51. 11. 1 ~ 昭和54. 9. 20	
3	近 森 藤 夫	昭和54. 10. 1 ~ 昭和56. 7. 31	
4	関 戸 研 一	昭和56. 8. 1 ~ 昭和57. 7. 31	
5	設 楽 武 久	昭和57. 8. 1 ~ 昭和58. 8. 31	
6	成 田 久 夫	昭和58. 9. 1 ~ 昭和60. 3. 31	
7	渡 辺 義 正	昭和60. 4. 1 ~ 昭和62. 3. 31	
8	岸 田 弘	昭和62. 4. 1 ~ 昭和63. 3. 31	
9	杉 山 俊 宏	昭和63. 4. 1 ~ 平成元. 3. 31	
10	五十嵐 武	平成元. 4. 1 ~ 平成 2. 6. 30	
11	小 川 祐 示	平成 2. 7. 1 ~ 平成 4. 3. 31	
12	西 田 一 孝	平成 4. 4. 1 ~ 平成 5. 3. 31	
13	瀬 尾 克 美	平成 5. 4. 1 ~ 平成 6. 10. 31	
14	保 科 孝 二	平成 6. 11. 1 ~ 平成 8. 3. 31	
15	板 垣 治	平成 8. 4. 1 ~ 平成10. 3. 31	
16	高 梨 和 行	平成10. 4. 1 ~ 平成11. 3. 31	
17	近 藤 浩 一	平成11. 4. 1 ~ 現在に至る	

18 歴代砂防課職員名簿

	課長	庶務				技			
昭和14	遠藤佐五右衛門	唐沢 金吾	小山 武男	酒井 等			小沢 潔	高倉源太郎	
15	遠藤佐五右衛門	唐沢 金吾	北島 武雄	酒井 等	五味 連		小林 茂	黒井 俊治	
16	和田 嘉六	唐沢 金吾	北島 武雄	五味 連	小林 安夫		小林 茂	黒井 俊治	
17	和田 嘉六	唐沢 金吾	北島 武雄	五味 連	小林 安夫		小林 茂	黒井 俊治	
18	和田 嘉六	唐沢 金吾	北島 武雄	小林 安夫			小林 茂	森 知行	
19	和田 嘉六	清水 慶男	藤沢 尚夫				小林 茂	小島 宗	
20	施設課に統合								
21	水野 鉉三	今井 忠貞	藤沢 尚夫	夏目 俊夫			鶴川 憲宣	小島 宗	
22	水野 鉉三	峯丸 宗松	藤沢 尚夫	溝口 豊治	夏目 俊夫	清瀧 妙子	中村 秀男	宮田 雄三	
23	水野 鉉三	清水 慶男	藤沢 尚夫	夏目 俊夫	清瀧 妙子	池田 静	宮田 雄三	中山 正男	
24	水野 鉉三	資料なし							

	課長	事務補佐	庶務				係	
25	水野 鉉三	宮沢英一郎	藤沢 尚夫	渡辺 正三	夏目 俊夫	宮岡 しま	村松 英一	清水 冠次
26	水野 鉉三	資料なし						

	課長	事務補佐	庶務係長	庶務				係	
27	水野 鉉三	夏目 録郎	夏目 録郎	藤沢 尚夫	松瀬 孝一	渡辺 正三	夏目 俊夫	村松 英一	
28	矢野 義男	夏目 録郎	青木善次郎	吉沢 正義	渡辺 正三	松瀬 孝一	夏目 俊夫	宮岡 しま	
29	矢野 義男	青木善次郎	青木善次郎	吉沢 正義	渡辺 正三	松瀬 孝一	小林三与喜	風間 玉江	
30	木村 三郎	青木善次郎	青木善次郎	市川 育甫	大宮 勇	小林三与喜	渡辺 正三	松瀬 孝一	
				風間 玉江	中沢 要				
31	木村 三郎	若林 政見	若林 政見	市川 育甫	大宮 勇	松瀬 孝一	竹下 長徳	古瀬 しま	
				高木 重行	中沢 要				
32	木村 三郎	資料なし							
33	木村 三郎	丸山 金治	丸山 金治	竹内 一与	大宮 勇	竹下 長徳	高木 重行	松瀬 孝一	
				中沢 要	飯吉 保子	角田 哲男			
34	木村 三郎	丸山 金治	丸山 金治	竹内 一与	大宮 勇	高木 重行	松瀬 孝一	古瀬 しま	
				松沢 清一	角田 哲男	千野 和子			
35	木村 三郎	中沢 喜利	中沢 喜利	竹内 一与	大宮 勇	竹下 長徳	高木 重行	松瀬 孝一	
				角田 哲男	千野 和子				

術							
三溝 一郎	穂坂 貞三	田島 武司	清水 恵治				
高倉源太郎	小島 宗	三溝 一郎	中村 賢行	武田 龍雄	大川 五郎		
高倉源太郎	小島 宗	矢島武之助	大川 五郎				
高倉源太郎	小島 宗	矢島武之助	大川 五郎				
小島 宗	土屋 年	塚田 由雄	野本 博				
土屋 年	荻原 幸雄						

瀧澤 一雄	金兒 正則	青沼 克巳					
中山 正男	宮崎 一男	滝沢 一雄	青沼 勝巳	正村 保雄	高野 章		
宮崎 一男	滝沢 一雄	青沼 勝巳	松林 正義	正村 保雄	高野 章		

	技 術 係					調 査 試 験 係	
池田 静	中山 正男	宮崎 一男	滝沢 一雄	青沼 勝巳	大久保友次	松林 正義	松瀬 孝一

	技術係長	技 術 係					
宮岡 しま	青木 守	宮崎 一男	滝沢 一雄	青沼 勝巳	水島 尚一	大久保友次	
中沢 要	両角 敏男	茅野 栄一	滝沢 一雄	青沼 勝巳	水島 尚一	白井 忍	中村 佳広
		金井 清	近藤 正昭				
宮岡 しま	両角 敏男	茅野 栄一	滝沢 一雄	青沼 勝巳	水島 尚一	近藤 正昭	滝沢 和夫
		白井 忍	中村 佳広				
宮岡 しま	両角 敏男	宮崎 一男	茅野 栄一	青沼 勝巳	水島 尚一	近藤 正昭	滝沢 和夫
		白井 忍	中村 佳広				
風間 玉江	両角 敏男	宮崎 一男	塩沢信山人	青沼 勝巳	水島 尚一	近藤 正昭	滝沢 和夫
		飯島 佳広					

古瀬 しま	竹花 友司	宮崎 一男	塩沢信山人	青沼 勝巳	水島 尚一	近藤 正昭	滝沢 和夫
		飯島 佳広					
中沢 要	竹花 友司	田中 良一	菱田 義寛	水島 尚一	近藤 正昭	滝沢 和夫	紅粉 彰
		宮原 雪夫					
中沢 要	松林 正義	田中 良一	菱田 義寛	水島 尚一	下平 小平	小口 毅	滝沢 和夫
		望月 巧一	宮原 雪夫				

	課長	事務補佐	庶務係長	庶務係					
36	木村 三郎	中沢 喜利	中沢 喜利	横地 武一	会津 衛	竹下 長徳	菊地 金光	宮原 雪夫	
				中沢 要	千野 和子	高木 利典	原 孝子		

	課長	事務補佐	庶務係長	庶務係					
37	阿座上新吾	宮入 直呂	宮入 直呂	横地 武一	会津 衛	竹下 長徳	吉田 豊	菊地 金光	
				上原 富枝	中沢 要	高木 利典			
38	阿座上新吾	宮入 直呂	宮入 直呂	井部 定雄	会津 衛	吉田 豊	菊地 金光	山口喜子雄	
				上原 富枝	田口 勝雄				

	課長	技 幹	事務補佐	庶務係長	庶務係			管理係長
39	阿座上新吾	増田 進	宮坂 幸吉	宮坂 幸吉	井部 定雄	塩野入貞雄	菊地 金光	増田 進
					山口喜子雄	上原 富枝		
40	阿座上新吾	増田 進	宮坂 幸吉	宮坂 幸吉	大川 正夫	塩野入貞雄	南島 貞一	増田 進
					山口喜子雄	上原 富枝		
41	松林 正義	滝沢 一雄	宮坂 幸吉	宮坂 幸吉	大川 正夫	南島 貞一	江口 葉一	滝沢 一雄
					塩野入貞雄	上原 富枝		
42	松林 正義	滝沢 一雄	宮島 耕一	宮島 耕一	大川 正夫	南島 貞一	江口 葉一	滝沢 一雄
					塩野入貞雄	上原 富枝		
43	松林 正義	依田 久雄	宮島 耕一	宮島 耕一	綿貫 顕	南島 貞一	江口 葉一	依田 久雄
					塩野入貞雄	原 ひろみ		
44	松林 正義	依田 久雄	宮島 耕一	宮島 耕一	天野 一男	南島 貞一	塩野入貞雄	依田 久雄
					原 ひろみ	石川 雅靖		
45	松林 正義	青沼武之助	小林 喬	小林 喬	天野 一男	南島 貞一	塩野入貞雄	青沼武之助
					原 ひろみ			
46	松林 正義	菅原 慶一	小林 喬	小林 喬	小山 茂	南島 貞一	塩野入貞雄	菅原 慶一
					原 ひろみ			

	課長	技 幹	事務補佐	庶務係長	庶務係		調査管理係長	調査管
47	松林 正義	菅原 慶一	松橋令太郎	松橋令太郎	小山 茂	塩野入貞雄	菅原 慶一	川船 宣彦
					原 ひろみ	石川 雅靖		桑原 侃道
48	松林 正義		松橋令太郎	松橋令太郎	小林 延秋	塩野入貞雄	岩倉 暉美	尾崎 功
					石川 雅靖	小林 光子		桑原 侃道
49	広瀬 潔		宮島 幹雄	宮島 幹雄	小林 延秋	池田 岩男	岩倉 暉美	尾崎 功
					上原 登	小林 光子		小林 真一

	砂防係長	砂 防 係			災害復旧係長	災 害 復 旧 係	
角田 哲男	松林 正義	近藤 正昭	小口 毅	望月 晏	山口 熙	青木 節義	上条 喜
		望月 巧一	市川 悦雄			下平 小平	福井 則八

砂防係長	砂 防 係			地すべり係長	地 す べ り 係		
松林 正義	鮎沢 克巳	小口 毅	武田 明真	田中 良一	近藤 正昭	上条 喜	望月 巧一
	山内喜美男				生駒彦三郎		
松林 正義	鮎沢 克巳	小口 毅	武田 明真	青沼 勝巳	上条 喜	望月 巧一	山内喜美男
	柳館 謙吉						

管 理 係		砂防係長	砂 防 係		地すべり係長	地 す べ り 係	
会津 衛	田口 勝雄	依田 久雄	小宮山和則	上条 喜	青沼 勝巳	武田 明真	望月 巧一
			柳館 謙吉	西沢 和夫		牧田 一夫	
鈴木 昭	江口 葉一	依田 久雄	武田 明真	柳館 謙吉	青沼 勝巳	上条 喜	小林 栄司
			柄沢 三男	西沢 和夫		宮島 孝夫	
篠原 新八	鈴木 昭	花岡 文雄	伊沢 修	柄沢 三男	青沼 勝巳	小林 栄司	宮島 孝夫
山口喜子雄			西沢 和夫	松本 環			
由井 久人	清水 敏雄	花岡 文雄	伊沢 修	柄沢 三男	青沼 勝巳	望月 巧一	小林 栄司
			西沢 和夫			松本 環	
由井 久人	清水 敏雄	花岡 文雄	伊沢 修	柄沢 三男	塚田 一夫	望月 巧一	小林 栄司
	飯島 茂		松本 環	西沢 和夫			
福井 則八	飯島 茂	鮎沢 克巳	伊沢 修	柄沢 三男	塚田 一夫	望月 巧一	小林 栄司
	野沢 昭雄		村田 貢	宮沢 啓			
川船 宣彦	野沢 昭雄	鮎沢 克巳	福井 則八	宮沢 啓	塚田 一夫	望月 巧一	小林 栄司
	石川 雅靖		桑原 侃道	山口 修			
川船 宣彦	野沢 昭雄	鮎沢 克巳	福井 則八	宮沢 啓	塚田 一夫	望月 巧一	山口 修
	石川 雅靖		桑原 侃道	西沢 五郎			

理 係	砂防第1係長	砂 防 第 1 係		砂防第2係長	砂防第2係	地すべり係長	地すべり係
吉村 博光	鮎沢 克巳	福井 則八	中島 利行	伊沢 修	徳永 高範	望月 巧一	倉田 克之
		西沢 五郎			宮沢 啓		山口 修
諏訪 豊一	日浦 茂喜	野沢 昭雄	西沢 五郎	伊沢 修	徳永 高範	望月 巧一	倉田 克之
		北原 正義			牧田 一夫		山口 修
諏訪 豊一	日浦 茂喜	保科 清	西沢 五郎	伊沢 修	野沢 昭雄	上条 喜	倉田 克之
		北原 正義			牧田 一夫		山口 修
					菅沼 昭彦		

	課長	技幹	事務補佐	庶務係長	庶務係		調査管理係長	調査管
50	広瀬 潔		宮島 幹雄	原 多門	池田 岩男	上原 登	藤倉 保	清水 成
					小林 光子			小林 真一
51	広瀬 潔		清水 俊光	原 多門	塩野入貞雄	上原 登	藤倉 保	保科 清
					小林 光子			小林 真一

	課長	事務補佐	技術補佐	庶務係長	庶務係		調査管理係長	調査管
52	広瀬 潔	清水 俊光	唐木 正雄	原 多門	塩野入貞雄	小林 真一	西沢 矩夫	大塚 敏夫
					小林 光子			依田 健一
53	関戸 研一	清水 俊光	唐木 正雄	堀内 仙次	塩野入貞雄	皆川 武人	西沢 矩夫	大塚 敏夫
					黒柳美佐代			沢戸 俊美
54	関戸 研一	小松川富雄	宮沢 充	堀内 仙次	塩野入貞雄	皆川 武人	花岡 幸久	金井 次郎
					黒柳美佐代			沢戸 俊美
55	関戸 研一	宮沢 賢三	望月 巧一	木幡 修二	塩野入貞雄	皆川 武人	望月 巧一	生駒彦三郎
					黒柳美佐代			沢戸 俊美
56	関戸 研一	宮沢 賢三	望月 巧一	松田 清	青木 基宣	黒柳美佐代	望月 巧一	山口 修
					沢戸 俊美			

	課長	砂防幹	事務補佐	技術補佐	庶務係長	庶務係		調査管理係長
57	上条 喜	福井 則八	山崎 昭三	北村 泰男	松田 清	青木 基宣	黒柳美佐代	大塚 敏夫
						高橋 孝行		
58	上条 喜	福井 則八	山崎 昭三	北村 泰男	松田 清	青木 基宣	黒柳美佐代	大塚 敏夫
						高橋 孝行		
59	上条 喜	福井 則八	原山 始	北村 泰男	丸山 功	青木 基宣	高橋 孝行	柄沢 三男
						井上ひとみ		

	課長	砂防幹	事務補佐	庶務係長	庶務係		調査管理係長	調査管
60	福井 則八	北村 泰男	草海 雄次	丸山 功	青木 基宣	三井 豊明	柄沢 三男	小林 正登
					井上ひとみ			

	課長	技術専門幹	地すべり対策幹	事務補佐	庶務係長	庶務係		調査管理係長
61	福井 則八	飯島 平	高坂 雄二	草海 雄次	丸山 功	青木 基宣	三井 豊明	柄沢 三男
						井上ひとみ		
62	福井 則八	所河 洋一	高坂 雄二	草海 雄次	稲葉 弘二	青木 基宣	三井 豊明	福沢 達雄
						竹内 まり		

理 係	砂防第1係長	砂 防 第 1 係		砂防第2係長	砂防第2係	地すべり係長	地すべり係
西沢 五郎	日浦 茂喜	保科 清	北原 正義	川船 宣彦	野沢 昭雄	上条 喜	倉田 克之
		戸田 明宏			牧田 一夫		平沢 清
					朝比 昌大		
清水 成	唐木 正雄	赤羽 良夫	北原 正義	川船 宣彦	水野 泰秀	上条 喜	大塚 敏夫
		戸田 明宏			朝比 昌大		平沢 清

理 係	砂防第1係長	砂 防 第 1 係		砂防第2係長	砂防第2係	地すべり係長	地すべり係
清水 成	唐木 正雄	赤羽 良夫	水野 泰秀	宮沢 充	中村 利隆	上条 喜	唐沢 行雄
		戸田 明宏			朝比 昌大		平沢 清
金井 次郎	唐木 正雄	赤羽 良夫	水野 泰秀	宮沢 充	中村 利隆	中沢 豊雄	唐沢 行雄
		手塚 秀光			朝比 昌大		生駒彦三郎
生駒彦三郎	宮沢 充	中島 利行	赤羽 良夫	望月 巧一	中村 利隆	中沢 豊雄	唐沢 行雄
		綱木 亮介			山口 千紘		手塚 秀光
高橋 孝行	飯島 平	中島 利行	山口 修	徳永 昭三	峯村 昌房	所河 洋一	島田 洪三
		山崎 憲雄			山口 千紘		手塚 秀光
高橋 孝行	飯島 平	尾坂 壽夫	山口 千紘	中村 長蔵	峯村 昌房	所河 洋一	島田 洪三
		森山 裕二			大井 敏補		山崎 憲雄

調 査 管 理 係		砂防第1係長	砂防第1係	砂防第2係長	砂防第2係	地すべり係長	地すべり係
松岡 良徳	寺田 久生	北村 泰男	尾坂 壽夫	中村 長蔵	大井 敏補	中村 利隆	今井 康允
			飯島 昭		森山 裕二		山崎 憲雄
松岡 良徳	寺田 久生	北村 泰男	尾坂 壽夫	中村 長蔵	大井 敏補	中村 利隆	今井 康允
			飯島 昭		篠原 定良		山崎 憲雄
松岡 良徳	今井 克彦	北村 泰男	中村 実	徳永 高範	二ノ宮陽太郎	唐沢 行雄	今井 康允
			飯島 昭		篠原 定良		城之内高志

理 係	砂防第1係長	砂 防 第 1 係		砂防第2係長	砂防第2係	地すべり係長	地すべり係
今井 克彦	飯島 平	中村 実	篠原 定良	峰村 昌房	二ノ宮陽太郎	唐沢 行雄	降旗 睦芳
							北村 勉

調査管理係	砂防第1係長	砂防第1係	砂防第2係長	砂防第2係	地すべり係長	地すべり技術専門員	地すべり係
小林 正登	飯島 平	菅崎 円	竹内 稔	二ノ宮陽太郎	唐沢 行雄	山口 修	降旗 睦芳
今井 克彦		篠原 定良		北村 勉			中條 徹男
							荻野 厚
小林 正登	所河 洋一	菅崎 円	竹内 稔	北村 勉	山口 修	尾坂 壽夫	降旗 睦芳
鋤柄 芳男		荻野 厚		藤沢 和範			中條 徹男

	課長	技術専門幹	地すべり対策幹	事務補佐	庶務係長	庶務係		調査管理係長
63	福井 則八	所河 洋一	中島 利行	坂本 満雄	坂本 満雄	青木 基宣 竹内 まり	酒井啓太郎	福沢 達雄

	課長	技術専門幹	地すべり対策幹	事務補佐	庶務係長	庶務係		調査管理係長
平成元	福井 則八	中島 利行	佐々木 勇	坂本 満雄	坂本 満雄	青木 基宣 竹内 まり	酒井啓太郎	松岡 良徳
2	大久保 駿	丸山 良雄	今井 康允	大槻 一雄	大槻 一雄	青木 基宣 竹内 まり	酒井啓太郎	小林 利彦
3	大久保 駿	丸山 良雄	今井 康允	大槻 一雄	大槻 一雄	青木 基宣 竹内 まり	町田 文雄	小林 利彦
4	大久保 駿	尾坂 壽夫	今井 康允	大槻 一雄	大槻 一雄	青木 基宣 山川千恵子	町田 文雄	北原 正義
5	小林 英昭	尾坂 壽夫	菅沼 昭彦	丸山 栄洋	丸山 栄洋	阪田 行男 課付	山川千恵子 町田 文雄	北原 正義
6	小林 英昭	塩入 正信	菅沼 昭彦	丸山 栄洋	丸山 栄洋	阪田 行男 課付	山川千恵子 町田 文雄	水野 泰秀
7	小林 英昭	塩入 正信	小林 正登	駒村 和久	駒村 和久	山川千恵子	黒川 正志	水野 泰秀
8	近藤 浩一	山岸 久一	小林 正登	小出 五郎	小出 五郎	黒川 正志	石澤 啓二	水野 泰秀
9	近藤 浩一	北原 正義	小林 正登	白田 正夫	白田 正夫	黒川 正志	石澤 啓二	松本 久志
10	近藤 浩一	北原 正義	中澤 守	白田 正夫	宮沢 邦利	黒川 正志	石澤 啓二	松本 久志
11	坂口 哲夫	北原 正義	中澤 守	西 裕司	宮沢 邦利	黒川 正志	石澤 啓二	松本 久志

	課長	技術専門幹	事務補佐	庶務係長	庶務係		調査管理係長	調査管
12	坂口 哲夫	平沢 清	西 裕司	仙仁 健一	石澤 啓二	長澤 伯穂	松本 久志	松下 和永

注：昭和38年までは1月1日現在、以降は4月1日現在である。

(昭和23年から係制となり、昭和25年から事務補佐、昭和27年から係制となる。)

調査管理係	砂防第1係長	砂防第1係	砂防第2係長	砂防第2係	地すべり係長	地すべり技術専門員	地すべり係
藤牧 康男	所河 洋一	松橋 裕	丸山 良雄	北村 勉	山口 修	尾坂 壽夫	中條 徹男
鋤柄 芳男		荻野 厚		田下 昌志			和田 隆年

調査管理係		砂防第1係長	砂防第1係	砂防第2係長	砂防第2係	地すべり係長	地すべり係
藤牧 康男	鋤柄 芳男	中島 利行	松橋 裕	丸山 良雄	酒井 文男	尾坂 壽夫	和田 隆年
			長井 義樹		田下 昌志		戸谷 勝彦
藤牧 康男	鋤柄 芳男	丸山 良雄	酒井 文男	桜井 忠彦	和田 隆年	宮島 孝夫	三井 宏人
			早川 秀輔		田下 昌志		戸谷 勝彦
宮下 善人	田下 昌志	丸山 良雄	鈴木 一平	桜井 忠彦	戸谷 勝彦	宮島 孝夫	三井 宏人
			早川 秀輔		岡村 幸男		沖村 隆
宮下 善人	小林 政広	尾坂 壽夫	戸谷 勝彦	小林 正登	岡村 幸男	宮島 孝夫	三井 宏人
			早川 秀輔		清水 貞良		小林 寿利
宮下 善人	小林 政広	尾坂 壽夫	三井 宏人	菅崎 円	岡村 幸男	大口 浩一	清水 貞良
			早川 秀輔		北沢 敬康		小林 寿利
宮下 善人	小林 政広	塩入 正信	三井 宏人	佐藤 博文	岡村 幸男	大口 浩一	清水 貞良
			荻野 厚		北沢 敬康		小林 寿利
小林 政広	鈴木 顕司	塩入 正信	原 明善	佐藤 博文	安塚 弘明	木下 征男	清水 貞良
			荻野 厚		北沢 敬康		川住淳一郎
荻野 厚	鈴木 顕司	山岸 久一	原 明善	倉田 正弘	安塚 弘明	木下 征男	藤本 濟
			丸山 泰正		北沢 敬康		川住淳一郎
荻野 厚	鈴木 顕司	北原 正義	荻原 公寿	倉田 正弘	安塚 弘明	丸山 知章	藤本 濟
			丸山 泰正		青木 能健		川住淳一郎
鈴木 顕司	藤本 濟	北原 正義	荻原 公寿	倉田 正弘	浜 弘安	丸山 知章	加藤 裕之
長澤 伯穂 (10/1から)			丸山 泰正		青木 能健		矢口 大輔
松下 和永	細川 容宏	北原 正義	荻原 公寿	篠原 定良	浜 弘安	丸山 知章	加藤 裕之
長澤 伯穂			北澤 学		青木 能健		矢口 大輔

理 係	砂防第1係長	砂 防 第 1 係		砂防第2係長	砂防第2係	地すべり係長	地すべり係
細川 容宏	平沢 清	荻原 公寿	竹村 正	篠原 定良	浜 弘安	小熊 友和	加藤 裕之
							北澤 学

19 長野県治水砂防協会について

1 これまでの経過

昭和7年～9年にかけて、砂防事業の普及を図るには県全体が一体となって国に反映させる団体が必要であり、又中央からも地方に対して治水砂防協会設立の要望があり、昭和9年8月に県下各地の既設協会有志が集まって「長野県治水砂防協会聯合会」を設立した。

昭和9年8月20日、正副会長、各町村長らが上京、内務、大蔵関係当局に陳情、砂防事業の拡充を要望した。これが本会活動の第一歩である。

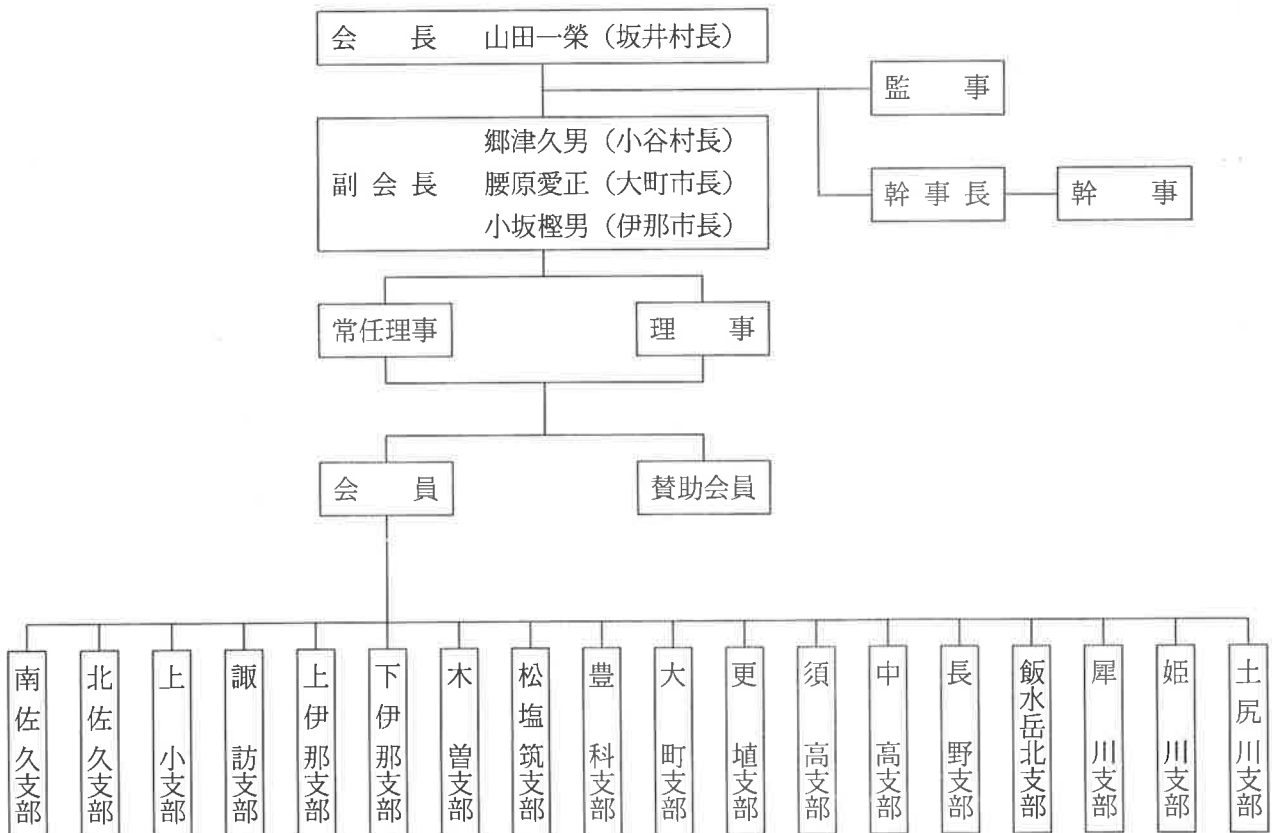
昭和10年7月の総会において、会の発展的組織強化を図るため本聯合会を解消し、「長野県治水砂防協会」と改称し、面目を一新した。

又昭和10年には、今後の砂防予算対策には全国治水砂防協会を設立し、協力に対処するのが一番であるとの意見の一致をみ、本協会が活発な活動をした。昭和11年4月には全国治水砂防協会の基礎が確立され、昭和15年2月法的根拠をもつ「社団法人全国治水砂防協会」と改称し、中央、地方を通じ相提携して名実ともに砂防事業促進のための柱となって今日に至っている。

このように本県治水砂防協会は、全国に先駆けて設立され、全国治水砂防協会創立のため尽力するなど、砂防事業に対する先進県として活躍してきたわけであるが、設立以来66年間、一時戦争などにより低迷期はあったものの一貫して本県砂防事業の推進に大いに貢献し、現在に至っている。

平成12年8月4日に第62回通常総会を開催した。

2 平成12年度の組織



3 平成12年度の役員名簿

(平成12年11月10日)

役名	氏名	職名
会長	山田 一 榮	松塩筑支部長 (坂井村長)
副会長	郷津 久 男	姫川支部長 (小谷村長)
"	腰原 愛 正	信濃川姫川水系砂防促進期成同盟会長 (大町市長)
"	小坂 樫 男	天竜川上流治水促進期成同盟会長 (伊那市長)
常任理事	島崎 陽 吉	南佐久支部長 (佐久町長)
"	唐沢 彦 三	須高支部長 (小布施町長)
"	戸谷 庄 一	長野支部長 (鬼無里村長)
理事	遠山 順 孝	北佐久支部長 (立科町長)
"	保科 俶 教	上小支部長 (東部町長)
"	林 新 一郎	諏訪支部長 (岡谷市長)
"	熊崎 安 二	上伊那支部長 (飯島町長)
"	小木曾 亮 弑	下伊那支部長 (根羽村長)
"	武重 善 博	木曾支部長 (木祖村長)
"	水谷 太 一	豊科支部長 (豊科町長)
"	腰原 愛 正	大町支部長 (大町市長)
"	宮坂 博 敏	更埴支部長 (更埴市長)
"	綿貫 隆 夫	中高支部長 (中野市長)
"	小山 邦 武	飯水岳北支部長 (飯山市長)
"	寺島 宗 正	犀川支部長 (生坂村長)
"	北田 忠 弘	土尻川支部長 (小川村長)
監事	大日向 一 繁	八坂村長
"	福島 信 行	白馬村長
"	吉沢 義 夫	美麻村長
参事	西山 幸 治	松本砂防工事事務所長
"	浦 真	天竜川上流工事事務所長
"	原 義 文	多治見工事事務所長
"	母袋 創 一	県議会土木住宅委員長
"	下村 恭	" 副委員長
"	古田 芙 士	" 委員
"	池田 益 男	"
"	山元 秀 泰	"
"	風間 辰 一	"
"	佐々木 祥 二	"
"	佐野 功 武	"
"	竹内 久 幸	"
"	石坂 千 穂	"
顧問	光家 康 夫	県土木部長
幹事	坂口 哲 夫	県砂防課長
幹事	平沢 清	" 技術専門幹兼砂防第一係長
"	西 裕 司	" 課長補佐
"	仙 仁 健 一	" 庶務係長

20 長野県地すべり対策協会

1 これまでの経過

本県の地すべり対策事業の歴史は古く、砂防事業と軌を一にして推進されてきたが、昭和21年の新潟県能生谷柵口の大地すべりや、長野県の茶臼山地すべりをはじめとして全国的に地すべりによる被害が続出するに及んで世人の関心も高まり、国土の保全と民生の安定のうえからこれらの対策を講ずる必要に迫られてきた。そこで治山や砂防の堰提工法のみでは十分な成果を期待できないような地すべりに対する砂防工法の研究が要求され、昭和22年新潟、富山の両県と三県地すべり対策協議会を結成し、資料の交換、技術の開発に協力する体制を築いた。この協議会がその後石川県、徳島県を加え、更に各都道府県が参加して現在の全国地すべり対策協議会に発展した。

昭和33年、地すべり等防止法が制定されたことを契機に、同年7月14日本県の地すべり対策事業の普及発展及びその促進を図るため、長野県地すべり対策協会が結成され、以来42年間、県下の地すべり防止事業の推進に鋭意協力し、現在に至っている。

平成12年6月16日に第43回通常総会を開催した。

現在会員数 52市町村 3 団体

2 平成12年度の組織及び氏名

会 長	大日方英雄（県森林組合連合会会長）	監 事	山崎袈裟盛（池田町長）
副会長	寺島 宗正（生坂村長）	幹事長	近藤 高明（南信濃村長）
	郷津 久男（小谷村長）		大平嘉久雄（大岡村長）
理 事	塚田 佐（長野市長）		坂口 哲夫（県砂防課長）
	小山 邦武（飯山市長）	監 事	牧野 利信（中部森林管理局治山第一課長）
	小林 謙三（阿南町長）	岸 智（長野西部農地保全事業所調査課長）	
	宮下 寛夫（大鹿村長）	下井田 実（天竜川上流工事事務所砂防調査課長）	
	中島 学（四賀村長）	滝沢 嘉市（県土地改良課長）	
	中村 靖（信州新町長）	関 貞徳（県森林保全課長）	
	戸谷 庄一（鬼無里村長）	平沢 清（県砂防課技術専門幹）	
	北田 忠弘（小川村長）	西 裕司（県砂防課課長補佐）	
	宮島 和彦（中条村長）	小熊 友和（県砂防課地すべり係長）	
	大日向一繁（八坂村長）	仙仁 健一（県砂防課庶務係長）	



長野県砂防課のマスコット
“サー坊”

長野県土木部砂防課
長野県治水砂防協会

〒380-8570 長野市大字南長野字幅下692-2
TEL 026 (235) 7315
印刷：中央プリント株式会社